

海阪

北原白秋

青空文庫

道のべの春

半島の早春

三浦三崎

大正十二年二月一日午後、何処といふあてもなくアルスの牧野君と小田原駅から汽車に乗った。その車室に前田夕暮君が居た。何処へ行くと訊かれたのでまだわからぬと答へた。君はと云つたら大島へ行くつもりだ

つたけれど汽船に乗り遅れたので引返すところだと云つた。ぢやあ一緒に何処かへ行かう、それもおもしろいと云ふ事になつた。で結局三崎行ときめて、横須賀へ出た。出て見るとその駅の前にはもう薄ら寒い日の暮の風が吹きしきつてゐた。

ぼろ自動車の上

日の暮のぼろ自動車にすくみみつ赤き浮標見居り乗合を待ちて

風空に造船場の高く赤き鉄柱が焼け暮ならんとす

日暮れぬ路いつぱいに埋まり来る職工の群にひたと真向ふ

前まへと堰き溢れ来る人の顔どれもどれも青し押しわけてゆけば

雪のこる片山蔭の板びさし今は見て安しあかり灯がつ点くも

外見ると幌ひきはづす手のつめたさ遙かの不二は吹雪雲の影

雪ふるは天城かと見る次の眼に夕焼の赤きまばら松見ゆ

山峡を遥に小さき人の影寒むざむと追ふ斑雪ぬかるみ
はだれ

山間やまあひに愛かなし小さしと見し人が窓際に避よくるこれの猿面ざるづら

遥かの山ぎざぎざに白し半島の上をわが自動車はまつしぐらなる

良夜行

あまりに月が良いので自動車を下りる。三崎の一里て
まへ、引橋の茶屋の少し先き、そこらが半島の最も高
い道である。

この空の澄みの寒さや満月の辺に立ち騰のぼる黄金こがねの火ひの立たち
満月の辺に立ち騰のぼる炎こなの粉宵空こなの澄みに澄み消けなむとす

山は暮れぬましぐらに駛^{はし}る自動車の真正面^{まとも}の空の宵の満月

月明き半島の夜を歩まむとし汐ふかき風をまづ吸ひにけり

とりどりに歩む姿ぞおもしろき松の並木のきさらぎの寒を

青く真澄む幻燈の空に枝さしかはす山松が景も早や二月なる

月の坂に我ら追ひ越す自動車の埃の立ちの秀^ほの青さはも

太鼓うつ音のきこゆる月の森そこかここかと聴けば遠しも

おのづから岡の歩みは太鼓うつ月照る磯に近づきにけり

北条入江

この廓さとは燈とも火紅しびあかし草臥れて雪どけの道を行けばひもじき

宵はまだ月の入江の枯葦の影くきやかに汐あかり満つ

枯葦や入江の瀉にのる汐の上づら寒し月はかがよふ

月と太鼓

私の雲母集中の異人館はその後海嘯で流されたとかで、
もはや跡方もなくなつてゐた。

今は無き我家の跡に櫓かけて磯の良あらたよ夜を子ら太鼓うつ

月がたたたく太鼓ならしとおもひきや我家の跡の子らが興なる

春あさき囃子と求め来て月の磯の我家の跡の汐あかり見つ

来て見ればいよいよ近き月明り通り矢も見ゆ城ヶ島も見ゆ

照り曇る月の夜ながら小童こわらべがたたたく太鼓の冴えの愛かなしさ

童らがたたたく太鼓は月の夜とこだましにけり島の森より

何がなし心安きはたぶたぶと石垣をうつ満ち汐の音

臨江閣

元の私の家の隣である。当時親しくしてゐたその家も代が變つて今は旅館になつてゐる。ここに私達は泊ることにした。

この宿は小松にまじる枯葦の影し騒げど月明りせり

月明く風やや烈し湯をいでてさやぐ小松の影を見てゐる

沖釣の宵の夜ふけの漁火の繁く遥るけき憂世なるかも

灘遠く連れてまたたく漁火の風のこなたの月夜さざなみ

あれだあれだ城ヶ島のとつぱづれに燈台の灯が青う点いてる

雨雲に月飛ぶ迅し旅蒸気のマストは青き燈をかかげたり

この宿の生洲いけすの汐に映るもの石崖と岩の墨いろの影

友よ飲まむ寂しと言葉落したり音せぬは汐も満ちたるらしき

草臥ぶれておのれ素直になりをなごにけり酒やふふまな歌はせ女子

われ酔ひぬ君もうたへよ童わらべうたうたひ遊ばむあはれあはれ酔ひぬ

戯れて三首

頭に火をつけよ線香花火の火の粉こなの松葉菊ちふ華はなも咲かさな

童うた「金魚の鉢」ぞあなかしこおのれよろしよ「金魚の鉢」は

八景原

二月二日八景原に遊ぶ。

椿

この坂の椿の紅さ先のぼる一人は早くも佇ちて仰げり

女仏

あなかしこ女によぶつ仏なりけり触りひや冷き石にてはませど常ならず見ゆ

つめたけど触りて愛かなしと惚れてしが石の女仏の眼ま眸の露けさ

椿葉の冷えひの明りに浮き立たす石の仏のほそり肩はも

崖の上

崖の上の高畑道のはだら雪踏みほそりつつ一人は遠し

日は高きに雪と小松のほそり道人には逢はね下は波の音

振りかへれば振りかへり見つ荒布採りの海女一人が籠は紅つばき
挿す

雪うすき小松が間に啼く鳥は頬白か否か春も浅きか

八景原

昆布噛み冷酒ふふむと昼磯に集へどさびし一面の照り

はるばるに潮満つらしく思ふとき手をかざしたり迎への舟より

午ちかきひたひた潮の岩照りを迎への舟が揺れてはひり来く

舟上

八景原より城ヶ島へ

昼潮の照りの明りに漕ぎ馴れて遠く遊びし昔かなしも

昼潮に雙手ひたして思ふことかく父母と常に遊びき

満潮のゆたのたゆたに揺れゆかなゆくらくら漕げようつらうつ
ら行けよ

昼潮の満ちのたたへに漕ぐ舟のねもごろにとろき櫓の音となるかも

城ヶ島

二月二日午後

萱原

萱わくる音こそすなれわがほかは先ゆく人も遠しと思ふに

萱原の萱の遙かに思はずも先ゆく友が頭見せたり

萱刈る人ひとり居りけり枯れかれし萱の中ふかく身をうづめつつ

島山に深き萱刈る鎌の音青空にひびきた聞けんとす、昼

日小さしまだ遅からず仰ぎね臥て萱刈る音の刈り深む聴く

老媪

草刈りの七十ばかりのお婆さんに前田君がたづねてゐた。「お婆さん、この島でも盆踊の歌があるかね。」

「お盆には無えだ、お正月には盆踊があるだ。」「なんと云ふ唄かね、」お婆さんはどう思つたか、ふと唄ひ出した。おもしろい手つきをして、唄つてゐる時はなんと云へぬうれしさうな若やいだ顔をしてゐた。

が唄ひをはるとむつりとした元の顔になつて黙つてまた刈り初めた。その唄はかうである。

つ•く•ば•ね•の•峰•よ•り•落•つ•る•み•な•の•川•恋•ぞ•つ•も•り•て•負•け•
て•や•る•

私たち二人は腹をかかへて笑つた。さうしてまた寂しくなつて了つた。

萱刈りやめ媼をうなはうたふ日ののどかなんとその眼のうれしさうなる

歌ひをはり済まぬ顔しぬ島媼また枯草を刈りいそぎつつ

媼居り萱を刈りけり子らは来て萱を負ひけり日のちひ小さききに

萱負ひて子らは子らとて下りゆけり媪は刈りぬひたむきの刈り

島鶉

島鶉啼きつと思ひぬ深き萱のそよぎの照りのしづもりの中に

島山の萱の閑しづかに鶉めみて啼くなる昼は雌めもこもり啼く

すれすれに鶉飛び立つ萱の風また一羽立ちぬこもりたらしも

遊びが崎

昼潮に櫓臍漕ぎ落し思はずも幼なごゑ立てぬそれがをかしき

大椿寺

同日薄暮、城ヶ島より宿へ帰つて後、散歩のついでに立ち寄つて見た。椿御所がこれである。宿の近く、同じ向ヶ崎にある。

この寺が大椿寺ぞとはひり来て寂しと出でぬ日暮を二人

この寺も古うなりぬと陽の隈に尿しつつ云ふ我も寒むかり

さびさびと暮れしづもれば磯寺の障子はかける寒しとなしに

長井

二月三日薄暮、三崎より乗合自動車での帰途半で下車、長井で一泊することになった。翌四日、その磯を散歩し、裏道から県道へ出、逗子行の立場まで行きその日暮れに其処を立つた。その間の所見である。

水あかり

黒川の浅夜の冷ひやき水あかり江につづくらし広き沙しほざゐ騒

黒川の葦辺の冷ひやき水あかり夜汐かまじる暗くにほへり

川間橋かはまぼし何か藻くづの青めくは夜釣のさしてにほふならしも

安旅籠

この晩は少し疲れて苦しかった。心臓を弱めたのである。

灯ひのもとに夕餉せうくわうの騒さわぎ露あらはなるまづしき磯いそに行けばひもじさ

磯宿いそじゆくは下の祠ほこらに提燈ていとうが点つき白い幟はたけの月と風です

安宿やすじゆくのこれの硝子戸しょうじど夜風よかぜに鳴り佐島さしまの燈あかりうつつなく見ゆ

磯宿いそじゆくのこの婢はしため女めが言いなきはまたくつめたうろくづき鱗うろこづがどちか

友ともとゐてさびしとは思おもうはね一つの蜜柑みつだんいつまでもむきて酒さけうまか
らず

寂しけどなにか今宵の気の安さこの磯宿の磯香くさきも

鰯子の函

雨かとも夜すがらききし点滴は朝起きて見れば幟竿の揺れ

この磯は半ば枯れたる浜木綿はまゆふの日向かがやかし鰯子しこの函干す

磯に干す鰯子のかがやき目馴れねばうら寂しかり朝の餉けはまだ

まじまじと眺めて蜜柑むきゐたり硝子戸越しの鰯子あさての浅照り

今朝はまだ太鼓たたかず磯の鼻に竹馬の子が遠く沖見る

入江の波いまだかがやかずつつましく箸さしおきて今朝暇いとまあり

遠浅の春さきの江か今朝は晴れて風烈しけれど波の穂低し

風波の穂立の迅さあさあさ々々に見えつつは走れ白く白くかへ翻る

春と云へど横の出崎の日あたりもまださむぎむし枯木三四本

寒い風の入江の潮にすれすれ出てる枯草の島に日があたるところ

海苔

潮ふくむ浅きみどりの青海苔のすのこすのこ簀すのこ々々を嗅げば春なり

この朝や風は高けど片磯の石垣に青く海苔すのこ簀干す

老らくの寂さびしさびごころか浜へ出てかけろ鶏追ひゆく万祝衣まいはいの爺おぢ

小竹の村

この磯は枯小竹多し行くところ吹かれ吹かれぬ小竹あらぬなき

磯村は風を荒みか背戸ごとに矢竹篠竹家垣にせり

家垣の篠の枯藪風をしげみほほけなびけり窓の障子に

この枯れし竹は矢竹か女竹かと立ちとまり見つつ見つつ行きけり

家垣の矢竹の裏の紅つばき咲きにけらしな花二つ三つ

丘窪

丘窪は刈田の泥も刈株もさびびつくしたれ日のあたりつつ

丘窪は刈田に泥ぢし稲株のさびさびにけりそのこちごちに

丘窪の刈田のへりの溝川の青の水藻は目に新しき

群松の日かげのあをきはだら雪見て通るなりこころ冷えつつひ

日のあたる枯篠藪の円丘のところどころのしら梅の花

目にとめてはや寒からず柴刈る子ら日あたりの丘に何か笑へり

日蔭田をむつりむつりと群れ来る子ら早や日あたりへ一人は出づ
も

何祭る二月の子らぞ青櫛手に手に持ちてつつましく来る

春浅き片山蔭の女松原つばらつばらに日のあたりたり

岡裾も青みそめたり肥こえやると揺れかつぐ影もはや寒むからず

牛ひとつほつり出たり下丘の日照る畑の青きはづれに

雪ふかき窪田の畔の蚕豆のみづみづしさに見ておどろきぬ

誰かゝて豚小屋のぞく日のいとま安けからしと見て通りある

春あさき小葱がそばの草ぐみの実のつめたさを食べて見んとす

立枯銀杏

目にとめてはや寒からず冬銀杏かうかうと白う寂び明りたる

銀杏の立枯の枝の白金光のほうほうとして実にこまかさ

暇あり

梅はまだそこらここの雑木山眺めつつ行かな遊び遊びに

たまさかの暇いとまいただき出て遊ぶ二日三日ゆゑいよいよ愛かなしも

高畑道

風烈しき高畑越えて耳やわ柔き斑まだらの仔牛道はかどらず

青麦の高畑道の日の光斑らの仔牛眼もさだまらず

春はいまだ風かはげしきこの丘や警報球を赤くかかげつ

風の下り坂

雪どけのぬかるみ坂を吹きあぐる早春の風はまだ頬につめたし

浅黄の外套に頬かむりしぬこの風の磯山道は梅ところどころ

長井遠望

かくばかり小竹ささ多さき磯と知らざりき通り抜けて薄き陽ざしに見れ
ば

ここから出て見ようかと出て見てる洲崎の下の小竹の薄よい陽

薯がらの小積こづみのかげだ吸ふ煙草だ早春の出洲の烈風を除よけて

県道へ出る道

道を問へばどの家も障子ひらかずしておつとりと答ふ午ひるの里なる

早や青む畝うねの車前草おほぼこつめたよと踏みつつ伝ふ友が後べを

風冷ひやき棕櫚の根方に尿して日向を走る子が前の矮鶏ちやぼ

林新道

向うの切りくづし崖の黄の壁に陽があたつてる菜畑も見えて

もう春だ春だほうれトロツコが走る走る走る誰か手をあげる

あの頃のあのこころもち手をあげてトロツコで走るちやうどあれ
です

どこやらから春が来さうな雪の後あとですトロツコの土つちの東風です

さうだあの気合ださうださうだ一息にはるトロツコの走り

入江の上

引き潮にほとほと涸れし江の^{かみ}上の隣田寒し藁のみ積みぬ

潮の路こちごちに光れ黒き洲のおほかたは涸れぬ葦むらの外^{そと}に

風の向をりふし変る荻むらはたださわさわし眺めに出ても

枯葦が枯葦のかげを落してゐるただそれだけの温^{ぬく}い冬の日

多摩川上流の歌

途上

へうへうと心はかろし旅ゆくとけふ春風に吹かれてぞゆく

く 酒^{さか}みづきおのれわすれて昨夜^{よべ}はありき今朝^{けさ}は菜の葉の風見てぞゆ

り 青梅街道の春いまだ浅し山椒の魚提^さげて来る小^ちさき爺^{をぢ}に会ひにけ

早春の菜畑^{なばたけ}の風の爽かさよ野中の小^ちさき駅も見えて来ぬ

枯櫛目にとめていそぐ畑の道は行きつくるなし武蔵野に来ぬ

桑の曠野

国分寺、立川、青梅

吹きさらす曠野あらのの駅に兔をさげてぽつとりと待てる爺をぢも居り午後

み冬なり曠野の駅に遅れて来る二時過ぎの汽車の煙いま見ゆ

枯桑のほろほろと白く汽車の窓の傍^{そば}走るかにはてしなき見る

枯桑の曠野つつ切つてまつすぐな道がどこまでもどこまでも北へ
向つてる

時をり話^し為かけてふたたび向く窓^{まど}外^{そと}は白しはてしなき桑

日の暮の枯桑原に火がぽつと燃えて時のま消えぬ赤かりしかも

寒いさむい曠野の中を走つてゆく日の暮の汽車の白い煙だ

この曠野の小さな駅に遅れて来てすぐ発つ汽車のふかき鐘鳴かまなり

枯桑の曠野の窪のところどころ煙たてゐてかける村のある

山近く雪まだ残る桑の原の此処ここらにし見るは廂ふかき家

廂ふかく陽の照るとなき粗壁あらかべの枯桑のかげは映るともなき

風雲は気球のごとし冬枯の桑の曠野にただ一つ見ゆ

声高こはだかの曠野の人とむかひて坐りひもじき我や燐寸マチを赤く擦する

ああ名残なごりの夕陽ゆうひの榮はえやひとしきりそそぐ枯桑こんじきの原の金色こんじきの光

雪の山のつつましく近くあらはれ来て桑の枯野も今は末ならむ

雛店ともしびに灯あかくつきにけりはろばろし桑の枯野越え来し

多摩川上流

鉾杉の春の焦こげいろよろしみと眺め見あかず谿たに咀そばのぼる

冬山の山ふところの群むら杉すぎは鉾立ててよし寂びし鉾杉

日ひより和よきけふにもあるかな人居りて山くづすとこほ爆音ふかし

山裾は枯芝原のひと平たひらへ家居ゐ竝べり日のあたりよみ

多摩川原早瀬はやせにうつるつが柾つがの木の春浅うして人うぐひ釣る

多摩川原清き川瀬せに採る砂のかがやき白しうち響きつつ

多摩川の渡瀬わたせの砂の水を浅み山葵わさび採るべき春ちかづきぬ

春は早や向つ岸辺の梅の間にかすみて紅し櫂あかなるらし

この水のみなもと遠くほのぼのし馬酔木あしびの花も咲きそめぬらむ

春あさき川瀬の崖の老櫂の風烈しけれやしきり光れり

隣り立つ櫂と棕櫚との日のひかり春早き風に冷えみだれつつ

櫂の葉に常しづもらぬ日の光なほさへや風の瀬を越えて吹く

杉の谿

この御嶽みたけや春なりながら峯の奥は雪深やまびらきからし山やま開らきまだ

谿たにくま隈ひはは鶯ひはの声多し杉の花のやや秀ほに焦ほげて春まさほに來ぬ

杉谿せまの迫せまりの深さ時ありて鶯のむれ舞へど雪の山の蔭

斑まだら雪山には凍れ伐きりし杉はなまなまと積きみてみな棚にせり

岩いはがみ上がみのつめたき竹の秀ほは揺れてまことに冬も末かと思ひぬ

岩が根の氷柱の垂りに映りて通るわれかとも思ふ影のしたしき

山菅

山菅に陽のさしあたるたまたまはかすかにうれしのぼり道なる

谿くまの湿地に生ふる 鼬羊齒かすかなる陽の温くもりにあり

山がはの岩間の湍のひとところたぎつすなはち凍りたるらし

谿岨をいそぐひとりかたまたまはふり仰ぎ見居り真日の小さきを

おかめ笹日かげにそよぎところづら日向に枯れぬその間通るあひ

日の闌たけてややいそがしき心ありそこここに解とくる氷柱つづらの光

吹きさらしの岩ほこらに祠ほこらのごとき廁かはやありて見のさみしさよここの谿
は

雪の山道

雪凍る御嶽行者ののぼり坂ごごしとは思へ青き杉の香

鉾杉の鉾の尖りの幾重ね畳はる谿に雪はふりにけり

並み立てる谿の鉾杉白雪つもり見のかうかうと幾秀こもれり

音せしは老杉が上の雪の塊凍雪の道に落ちたるらしき

今落ちし杉の葉の雪はすこし砕け地の凍雪にあざやけく白き

白雪のこごりの塊をひろひ食み我すなほなり母をおもひつ

縦もみの木の差出さしでの枝の常盤葉のときをり篩ふ雪のかすけさ

雪しろき山畑は愛かなし雑木ざうきのさきちよぼちよぼと出てその実垂れた
り

山畑の雪の平たひらに暮がたの青ぞらのいろの吸はれつつぞである

ああ早春雪はだらなる山の尾を電信線は空まで走れり

後あとやま山は雪はだらなる杉の山前山はしろし伐きりし山かも

いただききの雪にしたしく煙あげて群るる屋根見ゆ御師おしの家かも

御師須崎氏に宿る。

風出でて山やまなり鳴ふかき日の暮は遙かに恋し海の汐しほなり鳴

山上の黎明

ひようひようと風吹きとほる山の秀ほは月かげ白し夜明けたらしも

雪ふかき山の尾の上に啼く鶏かけの啼きこた応かけふ鶏の声のしたしき

道のべの春

きさらぎや多摩の山方やまかた、まだ寒き障子あかりどの内、人影の、手に織
 る機の、ていほろよ箴をさうつらしき。立ちどまり、うつらに聴けば
 からりこよ、杼ひの鳴るらしき。三みつ杈またの花咲き湿しめる、山の井よ、
 下井の水も滴したたるらしき。

反歌

障子あかりどにすずろにひびく箴をきの音山辺の春はすでに動きぬ

山かげの懸樋かけひの縁へりの紐ひも氷柱つらら本末もとすゑほそうなりにけるかも

造り酒屋の歌

水きよき多摩のみなかみ、南むく山のなぞへ、老杉の三銚五銚、
 常寂とこぎびて立てらくがもと、古りし世の家居さながら、大うから今
 も居りけり。西多摩や造つくり酒屋ざかやは門かど櫓やぐらいかしく高く、棟さは
 に倉建てな並なめ、殿づくり、朝日夕日の押し照るや、八隅かがやく。
 八尺やさかなす桶のここたく、新しぼりしたたる袋、庭広に干しも列つらぬ

と、咽喉太のどぶとの老いしかけるも、かうかうとうちふる鶏冠とせか、尾長鳥
 垂り尾のおごり、七ななづま妻の雌めをし引き連れ、七十羽ななそはの雛を引き具
 し、春浅く閑しづかなる陽ひに、うち羽ぶき、しじに呼ばひぬ。ゆゆし
 くもゆかしきかをり、内外うちとにも満ち溢るれば、ここ過ぐと人は仰
 ぎ見、道行くと人はかへりみ、むらぎもの心もしぬに、踏む足の
 たどきも知らず、草まくら、旅のありきのたまたまや、我も見ほ
 けて、見も飽かず眺め入りけり。過ぎがてにいたも酔ひけり。酒
 の香の世々に幸さいはふ、うまし国うましこの家やぞ、うべも富みたる。

反歌

大御代の多摩の酒屋の門かどやぐら 櫓酒の香さびて名も古りにけり

西多摩の山の酒屋の鉾杉は三もと五もと青き鉾杉

餅搗きの歌

武蔵野や多摩のみなかみ、御嶽道みたけみち 弘沢ほつさわの口、春浅きひなた日南のそ
 とに、餅搗くや爺は杵とり、臼のべや婆は手に捏ね、ぼたらこと
 のどにむか対ひぬ、ぼたらこよゆるにとめぐる。閑しづかなるここのらの里
 も、雛祭ちかづきぬらし。御形ごぎやう咲き蓬萌えたり。古りぬれど雛
 もかざれり。山もあり川もありけり。こもり啼く子ろも居るらし。

道みち埃ぼこり しろじろ立てて、吹き過ぐと風はさむけど、雲ゆけば日
 ざし洩れ来て、おのづからうら安の世や、ぼたらこと爺は杵とり、
 ぼたらこと婆は捏ねつつ、水凧する。

反歌

春なれば草の蓬も搗きこめてのどかなるらし餅もち搗ひきををる

道のべののどの餅搗きおもしろと見つつあかすも杵の手ぶりを

めぐり見つつ見つつあかすも搗くたびに杵にのり来る餅のふくらみ

搗きたての餅もちひならずとしろき粉の米の粉まぶし手にたたきをる

§

山道にかかる

しろじろと埃あげくる道の風やや片かたよ避けて旅ごころあり

人も見えね御嶽みたけさんだう山道の風かざほこり埃目にたちてしろき午ひるす過ぎにけり

印旛沼吟行集

五月中旬、千葉県人会よりの帰途、千葉より印旛沼の
吉植宅にゆく。

この己は鱒になりぬ天然更新の君は鯰になるならよしも 夕暮へ

うれしくておれは鱒を踊るなりこれは大きい印旛沼の鱒 牧水へ

両国の一ぜんめし屋でわかれたるそのち恋し伯林の茂吉 茂吉
へ 二首

ざるふりてすくふお前がうれしくておれは鱒になりにつけるかも

おもしろとうれしうれしと尻ふりておれが踊ればほめられにけり

初夏の印旛沼

印旛沼展望

下総いにはや印旛おほぬの大沼見にと来て見ておどろきぬはいだ灰濁める波

はろぼろし葦原かけて湛ふれば空よりも明し大いんばぬまき印旛沼

草食むと赤馬あか放れるる土手越しに一面あかに明るあれが印旛沼

印旛沼いんばぬの屯やなぎの楊ゆたかなれや息おきな長の風ながに垂れて靡かふ

印旛びと出水かしこみはろぼろし葦原かけて植あえし楊彼れ

印旛沼家居とぼしき沼尻ぬじりにも老木の楊絮わた深みつつ

印旛びと印旛の津々に屯して魚なとり葦刈りにしへ思はむ

友が家は沼尻ぬじりのいづこ目も遥はるに葦野つづけり河楊も見ゆ

註・葦野（アシヤ）はその地の俗語である

千櫨と歩む

二人は遅れて行つた。久しぶりで汽車の中から飲んだ。この辺では四合瓶一本と大きな白い盃を二つ持つてゐた。勘いので大切に飲んだ。

日の照りて茅花つばなそよめく浅茅原我等あぐらる冷き酒ひやのむ

風あそぶ土手の蓬生たわたわに愛かなし女かなびきこもらふ

蓬生にいとど沁み照る酒の滴たり惜しみ愛かなしみ飲みてゐるかも

酒を惜しみ春を惜しむと印旛沼や土手の長手をあかず飲み行く

印旛沼いんばぬま津々の荻原風ふけば見ゆるかぎりが皆そよぐなり

枯葦にとまるすなはち揺れ揺れてよしきりが鳴けり若葦の原に

この友と酒をふふめばねもごろに見つつよかりしあの頃おもほゆ

事繁しげみ常さかし離ればまれまれものどにはあはず君とのまらずも

酒飲みてまことよろしといふひととまことよろしくのむがうれし
さ

菱の花菱の実となるあはれさも早やただよへり舟にて見れば

朝刈の戻りなるらし草負ひて渡し舟待つ姉と弟

南風みなみよし葦と水田の中道は葭切も鳴けば蛙も鳴くもよ

昼餐

ねもごろの印旛びとかも白の馬木につなぐとし一まはりすも

白馬しろつなぐ君がお庭の陽の影は百日紅の老木おいきの若葉

昼ながらこの幽けさは印旛沼の湛への澄みの響かふならむ

一つゐる葭切のこゑはすがすがし広間とほ徹りて家裏やうらに響けり

しみじみと酒を控へて涼しきはこの大きな家いへの葦原の映はえ

大きな家の外の日の照りあはれなり鶏遊かけろべり小ちさくうごきて

印旛沼の出水ふせぐと臨終いまはまで畏かしこみし人のよかりける酒 庄亮氏
の祖父君のこと

印旛沼の出津でづの若葦さやさやに響つたへて為すありにけり 庄亮
氏に

蓮うゑて楽しまむよとほのぼのと酒のみていふ言ことのよろしさ

印旛沼の大きたたたとさながらに常を湛へつ上おほらかに

やさし妻ころも更へつつすがすがと笑ます君かも髪に手をあてて

舟に乗る

あさみどり葦間の小田の下したもえ萌に蛙鳴きたつ霧雨さめの前

時ぐもり印旛落しを榜こぎ出でて幾時いくらならぬに明るさざなみ

時ぐもり下しもの水路の日たむろの楊の揺れもすぐかげるなり

ついそこの枯葦束の裏に来て日和よろしく葭切鳴くも

ふと見てし水のほとりの湿り花なでしこは紅あかし見つつ榜こぎある
 印旛沼狭き水曲の水の手の若葦の伸びの丈たけのさやけさ

楊と絮と鯉網

印旛沼いんばぬまの堤やなぎの楊老いにけり上げつばなしの四つ手網の上

夏なつごとに出水に水漬みづく河かは楊やなぎの絮わた白うして老いにけるかも

とのぐもり老木おいきの楊影落す水面みのもあか明りを飛べる絮あり

ねもごろに老木の楊絮つけておのづから離し立ちしづの閑けさ

楊より楊の絮が離れてをり穏かならし今日の曇りも

風たちぬ沼の隈回くまみの日たむろは楊の絮の飛びよきところ

元棹に早や結ゆひつけて張る網の縁水漬へりみづきゆく河楊かはやなぎのかけ

垂りふかき河楊かはやなぎの根のそよそよ風鯉捕る網はすばしこく張る

鯉ひそむ 河かはやなぎ楊やなぎの根の底明りがぼがぼと棹さしに搔きみだしたれ

鯉ひそむ張りのしまりを引き引きて網たぐる手に水はねあがる

印旛沼ぬの金鱗こんりんの鯉みじろがず夕風ゆふかぜの網あみに捕とらられたりけり

早やゆふべ水滴たり落つる網の目に赤き蟹かにが一つひつかかりてゐる

印旛びと鯉網は張れ鯉の巢ねに日にし重ねかさねず畏かしこみ帰る

荻と莎草

数百町歩の荻と莎草と葦の原である。

莎草くぐの原昼もかなしと母が目を離れかつつこもる夏ぞ来向ふ

朝草は朝に刈り干し夕草は夕べに刈り入れすべな会ひけり

出津の夏いよよ深むか荻の葉の荻臭くしてすべし知らぬを

浅宵のかやつり草に似て大き莎草ちふ草を藉ねきて寝るなり

荻がくり莎草も荅めど大き手の男どち来て酒を惜しめり

ほのぼのと莎草の花さく荻むらは残暑の照りに後刈りぬべし

早や涼し葦原行けばしら玉の露上りをり秀にも縁にも

母馬仔馬

友が家は小米ざくらのこぼれ花けふあはれなり仔馬跳ねるて

この出津の葦谷の照りにゐる馬は涼しかるらむ子を遊ばせて

仔の馬も前の荻生の日の照りに涼かぜ食ふと出て馴れにけり

此^{こなた}方向^{なた}く仔馬は愛^{かな}し母馬の莎草^{そげ}食む傍^{そば}ゆ眼をあけてゐて

春生れし仔馬はいまだ乳のみて遊ぶのみなり螢草の花

仔の馬の露けきまみに飛ぶ蝶^{ぶよ}子のまつはりしげし夕づきにけり

若荻原夕風吹けばあはれなり仔馬はかへる母に添ひつつ

馬^ま柵^せ越しに小米ぎくらの花見て居る仔馬の頤に薄き髭あり

葦間の明暗

葦むらに舟とめて久し湿り風ソフトにも感じ水透かしをる

水の上の影はすべなし菅は菅葦は葦としさやかにかがよふ

すべはなし水面に映る葦茎の太きは太き細きは細き

かの水の明るき^{めん}面にふと映る葉の影は^ぬ抽けて揺れし菰の葉

明らかに水漬^{みづ}く根方の葦茎は突き入るごとし影に折れつつ

葦茎のうぶの柔毛^{にこげ}のいみじさよ水^みづくその毛はつけぬ白玉

葦
陽の映えてまたあかあかとすべなきは穂のちぎれたるばんばらの

鳩

印旛沼の水照^みりのかすみ夕まけて湿らむとすらし鳩の鳴き出でぬ

印旛沼日の春けば鳩のこゑこちごちに明る遠の靄より

水鳥の鳩の浮巢のさだめなさまみかさ水量まされば辺へにと浮きつつ

夕沼のこちごちに浮く鳩の子は一羽は浮かず連れつつぞ鳴く

津の間のあひ広き水路にぽつぽつと出て見て消ゆる暮の鳩なれ

榜こぎかへる舟のあとべに浮く鳩の尻ここゑは長く水にひびけり

ほのぼのと鳩の浮巢もしめ湿るらむついたちの月の入るさの闇は

夜食

印旛沼ぬの金鱗こんりんの鯉みじろがあきらず諦め果てし姿思もひ食ふ

昼捕りし鯉の洗ひの水紅は大にんにく蒜磨りて浅夜食あきよたぶべし

印旛沼の真夜のあやしき小つづ雨鯉鮒どもが光りつつあらむ

印旛の葦

印旛囃子

夜宴は農人たちの印旛囃子から始まつた。その讃唱歌。

印旛びと印旛囃子を葦原やよしきりが族ぞうにいにしへ習ひし

印旛びと津々の葦間にたむろしてこぞり葦刈り囃す歌これ

産土うぶすなの印旛の歌よおのづから荻吹く風のさやぎしこもれり

大沼のここの印旛いにはの葦の芽のさやさやし囃子ききにけるかも

常生くと朝魚夕菜あさなゆふなに印旛びと今も暇なく網と鎌もち

朝の出がけに出て山見れば雲のかからぬ山はない

筑波根に朝る夕ある旗雲の豊とよの紅あけ見て出ては刈るらむ

背せは魚なをとり妹は萩刈りよろしかもなしのさながら今も為しけり

いにしへの印旛の神が為せし会あひの蘆谷のこもり今も為るかも

よく遊ぶ印旛びとかも鉦うちて遊ぶみぎりは恍^ほれし顔せり

寒の鯉水にしめつつかつぐ子も夏は浅夜の鉦たたきけり

里神楽

農人たちの群の中から、紅い手拭の頬かぶりにひよつ
とこ面、派手な友禅模様の短い衣裳をつけて踊り出し
たものがある。里神楽の囃子が起つた。

畚ふぐいに盛り山をかつぐといにしへは笑ひぞめきぬ神楽囃子に

里神楽笑ゑらぎ浮かるとよく跳ぬる毛脛もとの本を見らく愛かなしも

こを見よ笑へ笑へとをどりをり笑へざりけりひたぶるなるは

おもしろくなつて、今度はこちらも飛び出した。なか
なかうまいをどりである。

踊るとて早もうれしくなりにけり頤に吾が結ふ手拭の紅

くれなるの里の手ぬぐひうれしくて頬にかぶるきはよ何も思はず

面^{めん}つけて豆の二つの眼の孔ゆ細く透かせば人小さくある

こはわるしかはつたなしと常云ふは遊ぶ心を常もたぬらし
尾山
に戯れて 二首

酒のみて恍れて遊ぶを酒のまず恍れず遊ばぬ蒼き顔せり

このをどる面のうらべよ痕つけて涙しじなり誰ししらずも
めん

ようをどるおのれ愛しも笛つづみあやに囃せばいよいよ愛しも
かな

麦搗踊

麦搗踊がまた始まつた。千櫨君と私とが飛び入りにまた踊り出した。

世の中は常しさびしよ麦ほこり浅夜立てつつ搗きてめぐらむ

すべもなく常なかる世に鉦つづみ振りて鳴らして遊ぶ子らはも

おもしろと手うちはやしてはや立ちていつかをどるとをどりに
けり

おもしろの印旛いにはびとかも夜をこめて教へたぶなり麦を搗く型

杵はかく持て麦はかく搗け然見せつえやとをどりつ連れてつきつ
つ

やと下ろす杵の手ぶりのおもしろさえやととめぐる麦搗きをどり

麦を搗くをどりをかしとおもしろと手振りをどれど足取はまだ

えやおもしろそやおもしろとをどりをりこれの浅夜の麦搗きのと
も

麦搗くと搗きてをどりてすべなけどをどりあかさむ鶏の啼くまで
杵とりて麦は搗かねど麦搗くとつれてをどれば香に酔ひにけり

なみなみと酒は注がしめややさめぬをどりをどりて吾は草臥れぬ
これの輪の小夜のをどりの身につきていよよろしくなりてくる

かも

ほのぼのと歌ひをさめてをどりの輪あはれとめたり鶏の啼くとき

その後

踊りはてて残り酒すふ口あたり末苦うして臍^{へそ}辺寒しも

寝かされてふすまかぶりて夜のほどろ手だしをどらせ叱られてゐる

踊はててさがる厨に里びとがいただく酒はまたうまからむ

黎明

この里の麦搗きをどり夜の明けは早や憂かりけりよしきり鳴き
る

あなかしこ童ごころもつゆなくて童さびしつ許されぬかも

信濃高原の歌

大正十二年四月、妻子を伴ひ、信濃小県郡の大屋に義弟山本鼎の経営に成る農民美術研究所に臨む。旁々七久里の別所、或は追分沓掛等に淹留、碓氷を越えて下る。

落葉松林の中に

別所より追分へ、追分より沓掛へ、その落葉松林より
落葉松林の中へ、淹留すること半月。

落葉松林に添ひて

浅間嶺^ねの麓高原から松の林は黒し春来^{はるく}ともなし

うち霧^きらし浅間はわかず雨雲の弥^いしき垂るるすぐろ落葉松^{からまつ}

小諸過ぎ御代田みよだに來ればすぐと黒きから松の原はろが遙はろにつづけり

夕せまる落葉松山にすぐろ木の高木は寒し目に久に在り

落葉松からまつの溪間たにまの窪かりくひは刈かりくひ株ひだの白う褪ひしあぜせたる乾田ひだの菱ひしあぜ畦あぜ

春浅き落葉松溪の線路ぎは哩標の白き杭がまた在り

霧雨の田中に囲ふ菰櫓いまだも寒し氷採りつつ

から松の夕ゆふ深ふか溪かたにの溪かけて汽車うねり出づる白き湯けぶり

溪かけてうねりふくらむ汽車の腹のぞきゐる頬に煤吹きあがる

末黒の落葉松材の夕ゆふ溪かたにのなだり伐り下ろしほうり出し積む

夕かげの線路のさきに丸太木積み仮駅ならしややに明り来

から松の溪間の駅に今日から停まり汽か罐ま鳴らす汽車よここは追分

この溪に汽車見に來り夕遊ぶ子等が騒ぎも雨ならむとす

から松の溪間のぼると子を連れてから松の原をかへり見つ我は

追分の油屋まで

この山は落葉松からまつつづきから松に白かんばまじり霧小雨きりこさめあり

夕せまる落葉松原のこぬか雨傘さして妻に子を負はせをる

から松は繁しみみすぐろしすぐろけど早や春来らし芽立しめ湿れり

霧雨の落葉松原の白かんばまだすがれつつ白う光れる

から松の林の道はから松積み二輪馬車がとほるそれだけの道

新芽^{にいめ}張るから松苗はいち早し春雨とめて千露^{ちづゆ}むすべり

この雨や芽立の萌黄かをすかにかから松の原を行けば湿^{しめ}り来^く

から松の芽立の林見にと来しまだすぐろ木の雨にぬれつつ

白樺は幹は白けどほそり木のこずゑの紅^{あけ}に雨も保てり

雨後の夕

夕明るこの雨あとを出て見るとから松の靄に向ひて歩めり

このゆふべ傘たたみもちて見てゆくは雨あとの橋のてすりの光

雨とめてゆふべあかるき浅芝のへりかぢりゆく曳かれ山羊はも

たれこめてきけるかはづをゆふべ出てこゑの明るくきくがうれし

さ

このあたり、から松の細枝を編みて垣とす、風致雅なり。

この門の夕明るみはから松の垣根ならしとほめて見にけり

落葉松原茜さしそふ雨霽なの和なぎしめらへり出でてながめむ

細雨の朝

雨の玉とめてあかるき真ま木きの枝えに紫あさく春は来向ふ

田の芝しばにぬか雨むすぶ蜘蛛あらの糸いとのかがよふ見れば春は来にけり

春あさきこの溜池めばえもの芽生藻めばえもに鯉の卵はとのはずまだ

芹青む小田の田べりのちよろろ水けさ見に來れば畦あぜを越えつつ

この背戸は桑の根さむし姫笹つやの枯れし艶つやのみ雨に明れり

追分の小田の窪田の初蛙こゑのをさなにふふみそめつつ

雨にこもれる

この雨にをさなかはづも鳴きつぐとこゑととのひぬ二日三日して

今朝の田に雨よぶかはづをさなけどころろと鳴けば春田めかしも

雨しげし下田の根芹つみに出て濡れるる媪をばかあの頬かむり

畑つものいまだ乏しか炬燵して芹のひたしを今朝もすすめぬ

あぶらうく鯉の味噌汁味噌くさし芹を醬油したぢにひたし食たべたり

靄しげき山の田見れば小舟ゆく潮来いたこの沼の沖田おもほゆ

山かげの田を鋤く人は馬持たず高き犁すきもてのびあがり鋤く

家裏ひとときの一木から松ふる雨のぬか雨ながらしとど霧へり

雨の間は急せき鳴く蛙しきりなり早や夕づきし障子にひびけり

雨なりしきのふをあれの八ヶ嶽やつ雪つもりけらし今朝白う見ゆ

追分の宿

追分は脇本陣のむら青の蛇腹の獅子の眼眸まみも老いたり

軒並は旅籠の名のみゆゆしくてこの追分の宿しゆくも荒れたり

夕ゆふ光かげにがた馬車駆るはあはただし小林区署の人にあらずか

春だ春だ木小屋の羽目にぶらついてゐる山火事警戒の赤いポスタ
ア

春の日も古きうまや駅の山羊の子は鈴ももたず夕帰るなり

から松の夕かげおよぶ破れやびさし石ここだのせていまだしめれり

浅間嶺の野分おそると屋根低く葺き竝べけむから松の原に

屋根低く窓ひとつなき側面に夕日いつぱいにあたる冬なり

仮かり宿やどを落葉松原にはいり来て落葉松つづき御代田へぞゆく

桑の根に枯れて光らぬ薄の穂根刈りすべくは春雨ののち

追分は^{ゆうかげ}夕光の間を戸を^さ閉して本陣のまへに寝る犬が^{あら}露は

あきらかに春とし思^もへど夕照のから松の梢^{うれ}が黒くそよげり

二十三日、山本夫妻、沓掛よりガタ馬車に揺られて来る。夕刻、うちつれて追分の岐れ道を見、惆悵として帰る。

馬子ぶしの古き追分夕陽さしぺんぺん草の二三本の花

追分の辻の浅芝斑^{むらも}萌えて伸びしはしより山羊に食まれつ

追分の辻に出て見て簡素なり馬頭観音の四月の夕陽

馬頭観世音の裏の夕陽に出でて^{ふたりみたり}るて二人三人さびし鴉見やりつ

うつせみの仮宿過ぎて追分の道の^{ふたて}二手になるがはかなさ

春浅き大名行列ここ過ぎて江戸は近しといそぎけらしも

この松は松笠多し枯なむと夕陽あかきに歩みとどめつ

放牧の絵馬

信州小県郡別所温泉（古名七久里の湯）北向観世音の
絵馬を観て詠める歌七十五首。絵馬には独立ちの馬を

画けるもの、或は二頭立ちのものあれども、その中に特に異彩を放てるは大額一面に数百となき放牧の馬を画けるものならん。その全額面は、ただ僅かに地平に青空を残すのみにて、凡ては群馬を以て満さる。芸術品としてはさしたるものにあらざるべきもまことに信濃の風土色を現はしておもしろし。これらの歌は主として大額の絵馬の記憶について歌へり。但し、表現の上 に於て、その全体の或は個々の神を伝へんとするに必ずしもその形態の写生に執せず。半ば以上は予が平生の「馬」そのものに於ける觀照と、連想の自由にかせたり。故にこれらは精神に於て新に予自身の絵馬

として創作されたりと為す方当れり。ただかの絵馬は
予に此の機会を些か暗示したるに過ぎず。

序歌

観音の春ののどかに詣でゐて我愁ふなしまかせまつりつ

我がこころ今は寛ゆたけしかもかくも春ののどかに遊あそび足りつつ

旅に来て今はた安しむらぎもの心放ちて遊びてをれば

この旅は妻と子を率みついとまなき旅ならずけり遊ぶとて来つ

旅ごころ今日うら安し子を抱きて絵馬のかずかず眺めまはりつ

絵馬師

七ななくり久里のこの観音の絵馬堂に献ぐる絵馬はみな牧の馬

青雲のそぎへのかぎり遊べよと絵馬師心あれや馬放ち遊ぶ

信濃の山の真洞まぼらに晴れて放ち心ゆく筆や馬描き満たす

馬は描け轡手綱のいましめは描かず放ちぬよき絵馬師かも

野に遊ぶ馬は描きつつ自しが遊ぶ絵馬師が心しぬび泣きたり

群なす馬描き放つ勢きほひさもあらばあれ幽けき馬は堪へて描きけむ

馬の顔馬の顔してゐたりけれ萱やすすきを吹く風の中うち

ねんねんに絵馬師が描ける愛かなし馬一つとしておなじ顔は無しもよ

馬主

奉納の絵馬の青駒よき馬によき名しるせり佐久の馬主

佐久びとはゆたかなるかも自しが馬に自しが氏うじな名しるし絵馬奉る

ひたむきの馬ぬしかもや観音と云へば馬頭観音のほか御名しらぬ
なり

馬市にむらがる馬は数しあらめ自^しが馬よしと牽きむけ我背

雲のごと市にむらがるいななきは北佐久の馬
小^{ちひさがた} 県の馬

野に放ち肥^{こや}せし馬ぞこれ見よと汝^{なえ}兄が青駒ほこらくは今ぞ

群馬

野をうづみ馬のかぎりが遊ぶ絵馬眺めあかずよ子にも見せつつ

牧の野に馬のかぎりが食み足りて遊べる絵馬を見るがゆたけさ

この絵馬の馬のかぎりが食み足りて遊べる牧は北佐久の牧

みすずかる信濃の駒は鈴蘭の花さく牧に放たれにけり

青雲にきほひいななき牧の馬の応こたへとよもす秋は今来ぬ

信濃の山の真洞まほらに解き放たれいなく馬は秋風の馬

青馬あをむるる牧のはたての秋山は金泥の霧にへだたりにけり

空ぎはに離りて遊ぶ白き尾のかすけき馬は雲にとどけり

息おきな長の野分のわきの息吹いぶき遠空きざに兆せども明あかしこの牧はまだ

野分来るや馬城うまぎの茅萱吹きなびけ風かぎなみ並しるし吹きちかづきぬ

胸高に風になく牧の馬やいとど白きは遠駆ける馬

薄吹く風になく青駒は力の張りや外とに急燥はやるらし

前搔き搔きはやり堪へる赤駒の尻尾の垂りに力こもれり

跳ね立ちて今飛ばむずる雄の馬の後脚あとあしの据わりゆゆしかるかも

をどり立ちたけ猛りおどろく赤駒のたてがみの振りに野分来れり

驚破すはと振る駒が尻尾の一と跳はねを描きとめて荒しこれの一筆

牧馬のきほへる中にゆゆしきは脚そろへ立つ大黒の馬

黒駒はゆゆしかしこし北佐久や野分しき吹けさゆるぎもせず

連銭の葦毛がむるるひとたむろ 白びやくこう 虹させり犬蓼の花

寂しくもつくばふ馬かたまたまは首向けて見居りおのが尾の振り

この牧の深風ふかかざなぎ凧なぎに息澄みて前脚折る馬は大鹿毛の駒

日のさかり坐りゆたけき大鹿毛のねむりは深し萱むらのまへ

身もたまもをどりゆるがせ仔の馬の遊べる見れば心ゆらぐを

蹴り蹴合ふ仔馬は愛かなし逃ぐるとし黄の月見草かろく飛び越す

秋風の黒の母駒仔を守ると目もはなたねば瘦せにけるかも

母馬は仔にはやさしけ仇ふせぐ構への張りは隙見せずけり

母が目を離れつつ遠し仔の馬は薄のあかき穂にかくれけり

風光る川はわたらず鹿毛の仔の小さきは戻る水のそばより

水のむと夕うなかぶし鹿毛の駒まだあはれなり眼をひらきつつ

まさびしく噓はなひる馬はたがらしの花にか触れし首はうづめぬ

風向ふ群の葦毛のたてがみはそろひて黒し揺れなびきつつ

青の瀬にをどり越ゆとし青の瀬に鹿毛の若駒いななきにけり

揺りおよぐ鹿毛の尻毛の垂り重くたふたふと沈み白き渦波

垂り重く尻尾沈めて青さをの瀬に前搔く馬は月じろの馬

前脚まへかけて岸にをどると急せく駒の尻毛がさばく渦の水玉

たじたじと後あとしぎ退りつつこの馬や尾の根据もとゑたり光る風の下しも

ものの蔓引きさぐる馬の長ら顔ゆふべはあかし陽に照られをる

朴の辺に日かげ求めつつ目のうすき月毛は疎うとし老いにけるかも

駈け駒はうしろ振り向くたまゆらも尻毛平になびかせにけり

駈け駒は四つの膝瘤力こもり蹄の裏し空向けつ皆

駢きほけ駒は勢きほひ空飛べ閑しづかなる駢きほけのとまりはひたと停とまりぬ

目も遥はろに野分吹きしくすすき原見わたして小さし丘に立つ馬

近き馬は太くゆたけく遠き馬は小さく描きたり幽かなる群

誰知らぬ深萱むらにかくれゐる鈍にびぐろ黒の馬も或はあるべし

薄より赤き顔だけ突きいだし馬あはれなり秋風ぞ吹く

この馬は吹きぬき風に草食みて耳ひとつだに動かさずあり

汗あゆる鹿毛の平頸ひらくび浅間嶺の山肌のごとき光くわうたく沢たくにあり

荻をぎすすき馬は馬づれこもらへば馬くさくして寄りがたからむ

空見ると老馬のまなこ大きけどしばしば閉ぢて目やにたまれり

水のむと白と黒とがうなかぶし白かがやけりこなたべの馬

すがし眼めを夕ゆう近づけて対むかひ合あふ黒馬くろと黒馬くろとに月明りあり

絵馬ながら馬はさびしよ白は白黒は黒とし遊ぶほか無き

風の萱行き遇ひ馬のたてがみは逆さかさなびけり驚きにけり

春駒

春駒や背に結ゆふ手綱ゆたゆたに垂りてたるめり奉納の絵馬

おほどかに額いつぱいにゑがかれて群青剥げし独立ちの馬

観音のこの大前に奉る絵馬は信濃の春風の駒

をはりに

子よ吾子あこよ馬はもたずも赤駒の木馬きうまや買はむ大き揺り馬

七久里の露

四月中旬、妻子を率て、信州別所温泉、古名七久里の湯に遊ぶ。滞在数日。宿所たる柏屋本店は北向観音堂

に隣接す。楼上より築地見え、境内見ゆ。遠くまた一望の平野みゆ。幽寂にしてよし。

観音の暁色

湯どころの春のねざめのおもしろさ鐘と太鼓の互み鳴りつつ

観音の太鼓とどろく夜のほどろ下田はるかに啼く蛙あり

観音の春はあけぼの紫の薨の反りの隅すずみすずの鐸すず

遠べにも観音さまの反り薨早う眺めて起きる子もあらむ

ふるさとは清水観音の雉子車を思ひて 一首

父恋し母恋してふ子の雉子は赤と青もて染められにけり

春暁

別所に男神女神の両嶽あり。その御手洗の未合して相染川となる。

八重雲の豊の紅あけぐも雲このあした女男の神嶽巻き立ちあがる

雲分きて男神は明くれほのぼのと女神はいまだ紅あけにこもれり

御手洗みたらしや相染川の両岸もろぎしに對ひて明る連翹の花

ほのぼのと相染川の水越えて連翹の花に遊ぶ風あり

みぞねずみ
溝鼠

ほのぼの籠めて霧ふかき黄の連翹の夜も明けむとす

春朝浴泉

起きぬけに新湯あらゆにひたり恙なし両手張りのベ息深うをり

ほのかをる硫黄のこもりよろしよと今朝安らなり湯にこもりつつ

ふくらかに空気こもらふ白タオル固うむすびて湯をよろこべり

浴泉のこの安けさに射しこもる朝かげ紅あかし顔を洗ひつ

ごむの毬湯には浮かしてあそぶ子とあかき日光ひかげをよろこびにけり

をさなかるいのちゆるがせ遊ぶ子の蹠あなうら見れば愛し紅あけせり

つくづくと身をいとほしむもとごころ湯にひたりつつしじ繁にゆすり

来

観音の春昼

観音の金鼓こんくひびけり湯に居りてのどかよと思ふ耳あらひつつ

鰐口の音ゆらぐもよ子を連れて或は妻か詣でたらしも

観音の金鼓揺りつつ子にとらす黄と赤の緒のねぢり緒のたま

観音の平鐘かねの緒長くこきたれしながき春日も暮れはてにけり

湯の町 春昼散策の一

春昼、宿の若主人の案内にて散策す。同君はカメラ党なり。

護摩たくと築地ついでの照りに映り来る人かげ見れば日も闌たけたらむ

七久里のみ湯の湯川は橋竝に蒲団干したり春の日をよみ

裏透きて家内やぬちあをきはかへるでの陽の映りらし燕ゐるこゑ

早鐘うちすぐうちやめぬ春もやや山火事うとくなりにたるらし

安楽寺 春昼散策の二

日のあたる築地のもとに絮わたふかき御形が咲きてうれしき御寺

萱ふかき御堂はかまち框光らずて障子いっぱいの閑しづけき光

おとなひて待つ間は久しま檐板のきいたの影は砌みぎりの外そとに移りぬ

寺庭の春の日向の閑けさよ山杉の風まれに音して

寺の子は日蔭の砌つたひ飛び素足さみしか眩まぶし目をせり

老松少し。伝肇寺を思ひて 一首

吾が寺は豊かなるかも春かけて山松の風さはに音しつ

独活畑 春昼散策の三

朝にけに芽独活かなしと盛もり高だかにかけつる土を今日は掻き掘る

山びとは春もふけぬと棚畑の芽独活かきほりのどにかがめる

独活の芽のかなしき紅あけがふふみたるこまごまし土はいまだ払はず

いや遠き昼の山火はのどのどと見もかすむらし芽独活ほりつつ

山畑にあれの独活ほるうしろでは君がカメラに撮とるべかりけり

独活畑に苜吸ひをるあのすがた春はのどかによう撮うしませ

常楽寺 春昼散策の四

薄束たかだかと積む御堂横日はあたりつついささか寒し

木もくれん蘭は寺の日向にあかるくて木ぶりかそけき紫のはな

木蘭の花のかたちは帰依びとが掌てをあはせつつかそけきがごと

薺へたばかり枝にはつけて日のあたる豆柿ならしここだくの薺

干葡萄酒にひたしつつこはよしと仰向きて食めば人が撮しつ

野の宮の二つ幟がこもごもに照りつかげりつ春はのどかさ

柴木たく野山ならしとながめみて煙しき湧けばのどならぬかも

春夕散策

向畑に榛はりの花かと見ゆる房ほたたと赤し出でて見んとす

高畑の柿の老木の下通さくらはあかくふふみそめにし

観音の矢場の日永にきそふ矢の的矢はおほく当らざりけり

路に西行の戻り橋あり。往昔、西行上人此地を過ぎ、畑の麦を見、村童を顧みて何の草ぞと戯れたまひしに、童すなはち冬莖立の夏枯草とし答へたりければ、何思ひたまひけむ、そのまま元来し道に歩み返したまひにけり。その名ここより出づと云ふ。

夏は枯れ冬は莖立つ草の穂のいまだは伸びね逢はむ子もがも

夕明る橋の上へ来つつ女め童わらへや甘菜吸ひほけ円き眼をせり

往還に出づ。余五將軍維茂の塚あり。

春は早や維これもちづか茂塚の草塚のふくらにあをし萌えそめにけり

道を出てやや歩ますと子が手とり夕うらさびし旅に来てゐる

ほれほれ馬が来るぞと片避けて子とかがみをりそのとほる間を

落莖の七久里漬を売る子ろに声かけてとほる馬子の足どり

往還の積木に下ろす子の重き腰かけてわれも遠田見てゐつ

春山の下田の畔あぜに来る鳶はおどろきやすし翼伸し立つつばさめ

観音の蓑ながめて帰るころ早や夕明る田螺たにしがころころ

このあたり鎮守の祭らし。

葱坊主夕づく遅し晴衣着て戻れる子等はいまだ外とにあり

氷沢行

別所の裏山づたひに半里余をのぼれば氷沢にいたる。

山高く、夏は三伏の盛夏と雖も氷雪ありと云ふ。ここ

に風穴を穿ち、蚕卵紙を貯蔵す。予がのぼりし陽春の候にも冷風絶えず。風穴の氷柱また深く、山椒の魚生れ、名知らぬ高山植物の花むれ咲きたり。この行、妻と伴なり。なほ湯川は一名相染川と称す。この温泉町を貫通する小流なり。石湯はその名の湯なり。岩石の湯床を以て名あり。

七久里ななくりや石湯いはゆへかよふ仮橋のかかりの上のしだり山吹

七久里のにはほふ湯川は山吹の一重の花ににぎはひにけり

この道はよろし山道吾が好きな山吹咲きてよろし山道

二

山ゆけば落畑多し落の葉の畑にあまるは路へ萌え出ぬ

七久里は落の名どころ窪畑の落のかぎりが臺に立ちつつ

出はづれて山路へかかる日おもての棚畑の蔭は大き葉の蔭

三

猫やなぎ咲きほほけたる山路につき自由画持ちてとよみゆく子等

学童らクレオンで写生してゐしが雲浅き山へいつか消えたり

四

山畑にいくつ燃す火のすゑなびきこもごも白し春たけにつつ

山畑や赤き埃ごみび火の風かざわき脇にかがめる人もものどにかすみつ

五

雲あかる山の真洞まほらに啼くこゑは丹にの頬ほの子こきぎす雉子きぎす早や巢立つらし

雉子きぎす啼く蔭山なだりこもごもに茅萱萌えたり丹つつじはまだ

六

山の井にさびしく髪はかいなでて子を思ふ妻か今はいそがな
 山の井の下井にひたす早蕨さわらびは根にそろへたり箆を吊るして

早蕨にこげの柔毛の渦の渦巻は萌えづるただち巻きにけらしも

七

浅芝や雪解ゆきげのにじみ道越えてまだひえびえしはだら光れり

ひようとして寒き風来る山はなにうはぎ上衣いそぎ着けぬ氷沢かも

八

苔水に山椒の魚はうまれるてまだこまごましひかげ日光いとへり

山椒の魚いまだちひさし追ひつめて杉の落葉のあかきすく掬ひぬ

岩清水堰せき層かさみたる杉の葉の下べ紅せり水漬みづかぬはまだ

九

高山やここには白きすがし花雪間の枯れに群れてふふめり

岩が根の斑雪はだれにほふ紫は名しらぬ花の数群るるなり

雪のべにほひはふふむ群花の春のいとなみ深からむとす

むら燃えの朱あけの櫛子しどみを見て過ぐと下りは急きぬ小石蹴りつつ

山里は桑の葉肥ゆる陽の青をさを遙けく春や残すならしも

雪かよふ山の榛生はりふに晴衣着て遊べる子ろがひとり笑へる

花盛る山の榛生の裏かけてしきり飛び啼くは四十雀らし

草刈のもどりならし

声はすれ向ふ岨そばゆく子等がかげ山松が間まをまだ出はづれず

農民美術の歌

大正十二年四月、信州小県郡の大屋村に農民美術研究所が開かれた。

鐘が鳴る

鐘が鳴る丘の研究所の鐘が鳴る雪が消えたよ春が来たよと鐘が鳴る

る鳴る

もうすぐだ農民美術の展覧会だ信濃の春も目に見えて来た

これからまた春蚕はるこの支度だ桑つみだ研究所は閉鎖だちよとお別れだ

開所式と丘の上の宴会

シルクハットの県知事さんが出て見てる天幕テントの外そとの遠いアルプス

うちの子があかい林檎をにぎつてゐるシルクハット抱いたほら笑
つてる

あの光るのは千曲川ですと指さした山高帽の野菜くさい手

輝く果実とその影とだ盛つたばかりだ楊の籠には竹のナイフだ

いま注いだ麦酒のコップと瓶の黒とにはたはたとあふる天幕テントの反
射

簡単に穂麦を染めた白い裂布きれ折目ついてゐる夏だ光だ

風だ四月のいい光線だ新鮮な林檎だ旅だ信濃だ

いい言葉だまつたく素朴な雄弁だ村長さんだなと林檎むいてる

さあプロジツトだ地面いつぱいに敷きつめた大鋸屑おがくづを飛ばす早春
の風

おれがほんとにうれしいことはそつと云はうか兄さんとここで見
られてる事

固い胡桃くるみだとびしりびしり押しつぶしてるとなりの未醒が大きな
両掌

食べさしの林檎とバナナを包んである折目のついたハンケチの白
光

木の鉢 其他

木の鉢に赤い漆でぼたりぼたりとなすりつけてある赤楊はんのきの花だ
もう春だな赤い漆をたらたら滴たらせ搔かきまぜてまた篋へらをあげてる

麦の穂をすうつと緑で描かいてあるなんと素朴な生地きぢの木の鉢

ざつとただ塗つたばかりだニス塗りの荒くゑぐつたつがざい柁材の鉢

朱に金で落花生の花を描いてあるこれは露西亞塗だ百姓の鉢

ふかしたての赤馬鈴薯あかじやがいもをこてこて盛つて食べろと出した木彫科
の鉢

荒くゑぐつたこの木の鉢の鑿目にも春が来ました輝く春が

浅い春です白樺の皮を剥はいで張るシガレット挿しの円い筒です

木を挽き切りぱんと二つにぶち割つた巻煙草入れの函と蓋です

荒彫の小さい書架です菓子のような赤い詩集を載せて冬です

白見たいなこの椅子を見ろゑぐつた木の根つこだ林檎畑の昼めし
の椅子だ

見ろまるでゴツホの画室だ椅子だ椅子だこのゆがゆがの栗の木の
脚

木の皿に一つごろりと描いてある紫の芽の出かかった馬鈴薯じやがいも

青木の春だな花托の白地にころがした赤と青とのぽつとりした団たま

栗の木の花が咲きます農民美術の木彫のナイフが日に光ります

彫刻人形

荒彫のでろの葉かげの白い家田には女が犁すいてる春だ

おおこれは両手をあげてる天てんを見てる木彫の百姓だおつたまげて
る

冬の日ひの炬たきばたで彫うつたか豆人形胡桃くるみかなにか割わつて食べてる

寒い寒い信濃しんのうの冬の豆人形まめどみんな頭かぶから裂布きれかぶつてる

赤あかに黄きの風呂敷ふしかぶつて葱ねぎをかかへてまだ娘むすめだろかたい雪道ゆきみち

北国きたくにのしやくんだ固かたい泣なきつ面つらこれは彫うつてるぽつり立たつた子こ

髪を洗ふ人形は春を待つてゐる首の根つこで手を合してゐる

染色——凶案

矢車やしやの実で赤う染めたと笑つてゐた山のお百姓さんの壁掛の鹿

何もかも畑や丘から写して来たわしが凶案だそのまま染めろ

塩原の夏

途中

どの村も桐の原つぱどの桐にも蝉がしいつく鳴いて朝です
雀の声だな雀の宮といふ駅だなやはり旅だなまた発車だな

宇都宮

旅さきで講演をして暑い日だのうぜんかづらが咲いて市街だ

この日 摂政宮殿下の行啓があつた。その少し前である。

暑さうにシルクハットがたかつてゐる立秋の駅のつばくらのこゑ

西那須野駅まで

西那須野だれも汽車から眺めてる夕顔の花の昼の強い陽

秋が来て夏が去いにますまつしろなかんぺうを干した那須の野つ原

西那須の青い曠野のあら草は風にまくれてきつい残暑だ

馬がゐて草も刈らいで放つたらかしだここの那須野の乳いろの花
何の穂かよく実がついた草土手の反射に沿つて汽車の午後です

電車に乗る

宮さまのお通りを待つ沿道の薄あかい花はみんな煙草だ

行啓おなりのまへ消防隊の朱しゆの筋すぢが並んで見てるたんばこの花

教科書の画ゑだ煙草ばたけのあちこちの低い藁家の日の丸の旗

唐^{たうきび}黍の金髪が早やふさふさと秋風に揺れる前に並ぶ子

西那須野行啓のまへのしんとした農園の白いつぼんの道

朱の杵の幌馬車のかげが遠くに見えたんばこの花の秋の日ざしだ

溪の残暑

どの馬の白い日覆^{ひよけ}も反射してちりからと来る溪の残暑だ

へそ茱萸ぐみは誰も採らぬか 溪岨たにそぼにかがやき垂れてしろい埃だ

この道はまつしろな道葛の花の紫の穂もとても埃だ

溪崖のひでりつづきに褪せかけた葛の花ですこの紫は

林の道

朴の葉の一枚の面めんの大ききよそれを何かが齒でかぢつてる

ちやうどかうした山擬宝珠の花だったよいつだったか二つ蕾んで

一つ咲いてた

黙つてると親友の子の肩を押へた朴の木にほら瑠璃る鳥りが啼いてる

浴泉俯瞰

塩原の塩の湯、対岸の岩壁の下、溪流のへりに湯の湧くところがある。湯は水に交り、水は湯に温まつてゐる。ここに常にひたるのである。この溪の湯は高い楼

上より俯瞰する時にいよいよ仙家のものとなる。

溪の湯に裸の男女がつかつてゐて一面に射す青い葉洩日

溪の湯だみんなはだかだ男もをんなも円光が^た発つて夏だまつたく

溪に見れば人間も自然のよい一部だ日がかがやいて波が揺れてる

あの溪に男と女がゐるそれだけでも夏は素朴な光に燃える

子が手を曳き浅瀬をわたる裸婦ひとり青く明るい陽と漣だ

溪の湯に髪洗つてゐる裸婦がある薔薇いろの手だ群青だ水は

夏だ夏男は立つてすつ裸だ溪流の水で背をこすつてる

裸婦ばかり溪の湯に寝て笑つてる天に小さな日が廻つてる

まるで鍵陀羅がんだらの浴泉の凶だあの溪の湯に朱の煩惱が照り動いてる

今はもう子どもばかりだ溪の湯が金色に揺れて空が焼けてる

浴泉の処女

甘露木かんろぎのほのかな花に陽ひがさして湯にはをとめのうすべにの肌

溪がはの岩のぬめりを越す水に小さい素足がまるで魚だ

溪の湯をながめ見ほれてをさない眼だときをりは乳に水かけてを
る

溪水たにみづにあのほのあかい乳のいぼいまはひたしてほほと笑ゑんでる
 うすべにのほのかな少女ほそぼそとなにか歌つてる腰に手をあて
 て

須卷を下る

ほうこれは牛蒡の花だな湯の樋とひの湯気がふつかけ濃いむらさきだ
 二本の穂の穂草にとまる二羽のでふ揺れてゐる間まに見て下つてる

山の田の糯米もちの穂は霧雨の今の小雨の露つけてをる

首のべて母と仔とゐる馬小屋に刈りためた草は二番刈りの草

仔の馬が口で選つてるぼんぼんはまぐさの中のわれもかうの花

われもかうだ見ろ一茎ごとに海老いろの珠がついてるああ秋だ秋
だ

母馬はうしろ向いてる仔の馬は馬柵ませで見てる孔雀草の花

不二大觀

不二大観 三保遊行集

小序

大正十三年正月五日、智学田中先生の懇招に応じて、伊豆修善寺を発して三保の最勝閣に赴く。この行父母を奉じ、妻子と伴なり。淹留五日、或は晴れ、或は雨。而も不二の観望第一なる有徳の間の朝夕は我をして感懐禁ぜざらしむ。羽衣の松竜華寺の探勝ともにまた清

閑極りなし。乃ち成るところの長歌一首ならびに短歌百七十二首を献げて些か先生の慈情に酬いむとす。記して小序となす。

不二を仰ぐ

沼津より江尻にいたる途上、汽車の窓より 五日

天つ辺にただに凌しぬげば不二が嶺ねのいただき白う冴えにけるかも

不二ヶ嶺は七なな面も八や峰もつむ雪の襲ふかぶかし眩ゆき白びやくくわう光

天ゆけば薄ら映ろふ雲のかけ不二のおもての尾の上へにし見ゆ

雪しろき不二のなだりのひとところげそりと崩えて紫深し

雪しろくいとど晴れたれ御殿場の真上の不二は低く厚く見ゆ

鈴川の不二の眺めぞおもしろき寒き刈田ゆ絵風あげたる

天そそり白く清さやけき不二が嶺はこのかの児すら見も飽かぬらし

常しろき山は不二の嶺あれ見よと為すなき父や子には見せつつ

よく見れば白くさやけき不二の秀ほのみぎり欠けたり地震なみの崩えか
も

不二ヶ嶺はいただき白く積む雪の雪せつえん炎たてり真澄む後あとぞら空

最勝閣に着く

清水港より渡船にて渡る 五日午後

大船の心たのめて三保が崎君が御殿みとのに参まり出で来にけり

風吹きてさむきみ冬を御垣みかきした下浜防風の茎まの真赤まき

小松生ふるここの御庭おにはに来寄る藻しほの汐ぎ騒あ広しにぎはひにけり

めづらかに夕光鎮ゆうかげづむ不二ヶ嶺のおのづから保つ明日のよき風

最勝閣にまうでて詠める長歌並びに反歌

風速かざはやの三保の浦廻うらみ、貝島かひじまのこの高殿は、天なるや不二をふり
 さけ、清見潟満干の潮に、朝日さし夕日てりそふ。この殿にまう
 でて見れば、あなかしこ小松叢生ひ、辺にい寄る玉藻いろくづ、
 たまたまは棹さす小舟、海苔粗朶のりそだの間あひにかくろふ。この殿や国の
 鎮めと、御仏のりの法の護りと、言ことよさし築かしし殿、星月夜夜ぞら
 のくまも、御庇みひさしのいや高だかに、鐸すずの音のいやさやさやに、い
 なのめの光ちかしと、横雲のさわたる雲を、ほのぼのと聳えしづ
 もる。しづけくも畏かしこき相すがた、畏かしこくも安やすけき此この土ど、この殿の青いらき葺か
 のあやに清すがしも。

反歌

この殿はうべもかしこししろたへの不二の高嶺をまともにぞ見る

不二大観

最勝閣より

天そそる不二をまともに我が見るとこの高殿に参まるのぼり見る

ここゆ見る不二のすがたは二方に裾廻すそみひき張れ清麗さやけきまでに

天そそりしろく反り立つ不二ヶ嶺の大き裾廻すそみの張りのよろしさ

駿河なる不二の裾廻のおのづから張りつつし及ぶ海うなの原かも

不二ヶ嶺はいよよ清麗さやけし群むらやま山の高山が遥はるに天そそり立つ

不二の暁色

朝ぼらけ不二の尾の上へにのる雲の紫明あかうなりまさるらし

ほのぼのと不二の裾廻にしらむ燈ひのつらつら帆船ほぐね行けりともなし

不二ヶ嶺はこごし裾廻の群むらやま山の柴山しばくらしいまだ夜明けず

ほのぼのと明けゆく不二のいただきは空いろふかし天の戸に見ゆ

空いろの裾濃すそごしの不二の立てらくは夜のほのぼのものにぞありける

不二の尾はいまだはねむれ天つ辺の秀ほの片かたづら面よ紅みさしつつ

愛鷹へ尾を曳く不二の片空の樺いろの晴れはいよよ凧ども

明る妙たなびく雲の百重にも不二の芝山あけ暁ならんとす

豊かなる不二の茜ほの秀ほに燃えてまたく明けたり今日は晴ども

朝びらき明けゆく不二の大前に網あび曳びき舟榜ぐ三保の崎はも

海苔とり舟

有徳の間より眺む

笠雲の昨よ夕見し不二のいちじるく寒けかりしか今朝のましろさ

清見瀉満干の潮の煙けに立てば柵しがらみ寒し海苔のしがらみ

朝あさ凍しの海苔のしがらみつらつらに見れども飽かず小舟つ継ぎ来くも

朝風あさかぜの海苔とり舟はほの寒し棹さし連れぬ二人づつゐて

海苔とるとたづきありけり朝びらき小舟をふね揺りゆく棹手かなしも

海苔とると浜片かたづ附きてゆく舟の目馴れし不二は見ずて榜ぐらむ

海苔の田は上潮うはじほ寒き海朶ひびの間に逆さの不二が白う明り来

春はまだ潮干に見ゆる海苔粗朶の列つらなみ竝なみ続き寒う霧きらへり

この眺めあか明りて寂さびし引き潮の海苔の田遠く清見寺見ゆ

海苔の田は水照凹みでりくぼむか海朶の間にかぎろふ舟の居をりど処わがなく

蛸の子は百ももの千鳥か頬のかぶりひかり移らひ海朶ひびの間にをる

こもりゐて誰が嚏たはなひりぞ海朶ひびの間も海苔の香立ちて寒からしあはれ

柑子照る宿

河野桐谷君夫妻と令息の宿るところ。六日、散策の後、
我らここに小憩す。

大き実の柑子照り満つこの宿は見てあたたかしここにあらむ

旅に来て去年こぞの今年の肩の凝りおのづゆるびぬくつろぎにけり

不二ヶ嶺の眺めゆたけく煮る酒のあなねもごろや父とよろしき

こぞり来しよしと思もひけりつつがなく遊べる子らを眺めやりつつ

これの子とあの子と遊ぶ日のたむろ柑子も熟うれぬ枝えにし垂りつつ

童らわらべに照らふ柑子ぞ撓とををなるそのこの母はころも干しつつ

閑しづかなる柑子の熟うれや母と子の睦むつぶこゑのみ庭にありつつ

午前の散策

藁すだれ掛け干す浦の日たむろは海苔とる蟹あまがやすらひどころ

干す海苔の簀すの辺のなづな伸び過ぎて咲き白らけたり浦の日和に

春は早や三保の砂地の日おもての白豌豆の翼はねがた状の花

松の間にここだ樽積くれむ洲の土手は行けどもさびし不二の見えずて

さざら波来寄る浜辺の朝光あさかげは松の間あるき明るかりけり

三保の春うつらうつらに榜ぐ舟の榜ぐとは見えね行き進みつつ

不二の夕照

不二ヶ嶺にいや重しきつもる堅かた雪ゆきのゆふべはあかく天あめに燃えつつ

押し移り朱あかく騒さやだ立つ風雲の波だち雲は不二を目ざせり

片空に不二は晴れたれ風雲のゆふべはあかく吹き立ちにけり

不二ヶ嶺は見れど見あかね卷雲の夕照早し紅あかう染そみつつ

清見潟夕ゆうでり照ひろし満汐の汐騒のかぎり舟の榜ぎつつ

昼の間を干潟に黒き海苔粗朶のゆふべは繁しじに汐にひたり来く

風前かぜまへの夕満潮ゆうみちじほのひとたひら渡船とせんは急せけり音に爆はぜつつ

夕明き横狭よこさの入江あはれなり葦村つづき舟混こめる見ゆ

舟べりに小箆うちたたき蟹が子の海苔洗ふ見れば冬も過ぎたり

不二ヶ嶺はまた雪ならし笠雲の浅夜あさよは白く下りおりる畳めり

雨にこもる

天霧らひ不二はかくりぬ三保が崎いたも濡れゆく千本松見ゆ

天霧らしふる雨ながら三保が崎いやしろじろに辺波寄る見ゆ

うち霧らしふりつぐ雨はひまなけど早や春めかし葦辺かすめり

潮ぐもり春の雨間あままに榜ぐ舟の櫓の音とおこりて沖べさす見ゆ

§

砂畑の浅き井のべにふる雨のいろこそ無けれふるが親しさ

小閑

父母無聊なり

足^{たら}乳^{ちね}根^ねを^を下^{した}心^たにおもへば浜松のさやけき騒^{さや}ぎ空に起れり

松風のさやけき聴けば生れ来しをさなき我^{えにし}の縁おもほゆ

松風に白き飯^{いひ}食^ひむ春さきは浜防風も摘むべかりけり

この浜の梵^{ぼん}音^{のん}声^{じやう}のさみしくて遙けきは空のあなたなりけり

§

日の真昼つくづく守れば不二の嶺の後あとの空をこもる雲あり

父母を高く思へば不二の嶺の後への空のはてなきがごと

これの子をしみみ思へば小松原松の千本の数わかぬごと

ただただにむか対ひゐてすら母おも父ちちは見て慰さむか対ひいませり

父は父母は母とて長閑のどあらし足さすりをらす旅の春日を

酒よしと喜ぶ父の老らくを下心したには泣きて清し酒選える

母父に妻がかしづくすがしさを下心したにはほめて言ことに云はなく

日はぬくしほのりほのりとたまたまは出でも見ませ不二を見が
てら

母父やたづきなからしをりをりは打ち出歩りかす不二を見がてら

見の飽かず不二を眺めてます母のうしろでゆゑに我は泣かゆも

ましろ髯おほぢ祖父のみ髯かな愛しくも手ぐさとる子に垂らしたるはや

吾が父や浜の小浜の行き還り何せ為さすらむ白き髯見ゆ

小夜

海のり苔そだ粗朶だに汐の煙け立ちて寒き夜は地酒もがもと父の宣のらすに

あかあかと葦あしび火たく屋やも小夜更けて汐霧きり来くらし沖つ千鳥よ

繁しじにうつ櫓こほの音凍こほりて闌たくる夜は荒磯ありその蠣たも附たきがたからむ

早朝

霜の煙けの未明まだきはこもる渡し場に子と出て見居り汐の満つるを

子には子の白の毛帽子かぶらせつなにしか清すがし朝の霧ぞも

この磯の浜防風に置く霜の濃くも薄くも見てを通らむ

ここらにも蠣は附くやと水みなぐひ杙ひの干潟のしめり母と透かしつ

寂しくも見つつ笑ゑましも蠣の子は荒磯ありその蠣の母の根に添ふ

御穂宮

八日、桐谷君（令息同伴）の案内にて一同御穂宮に詣
づ。麗明、風無し

三保びとやまだ春寒く簀すを干して海苔たたき貼る唾つけつ

風速の御穂の御宮のきだはしは真砂吹きあげて松葉層かさめり

風速の三保の浦廻やこの宮にかかけし絵馬は皆船の絵馬

大船の波乗りごころゆたけくと絵馬やささげし三保の浦びと

参道まいりぢの砂道すなぢに根匍ふまばら松照れる春日をほくりほくりゆく

浜宮の御宮の松に掛け干して唐諸がらも長閑に枯れたり

松ぼくりひろふ童が片言のいつ果つるらむ童とし居る

皆行きぬ吾子よいそがむ汝を待つとかの松陰に母の立てるに

松ぼくりしじに蹴あてつ松原や羽衣の松に行くはこの道

羽衣伝説

まことにも清し松原天馳けて舞ひくだる翼のけはひこそすれ

ひさかたの天つをとめがゆり掛けし羽ごろもの松はこれのこの松

さゝるさゝるし珍うづの羽ごろも取りかくし天つをとめが真素肌ますはだし見し

さにづらふ天つをとめが真素肌の乳房ふふの荅ふふみ人は見にけり

天あま人は消あまなば消あまぬがに羽あまごろもの袖あま乞あまひ禱あまめり草あま合あま歡あまの花あま

天向ふひとか羽ごろももうすぐごろも見えつつすべな夕さりにけり

ましら羽の天の羽ごろも夕羽振り消えにしひとのあやにかなしも

三保の松原

御穂宮より松原へ出づ。ここに世に謂ふ羽衣の松あり

風向ふ根ね疏あら浜松そなれ磯そなれ馴松今朝さわさわし春日さしつつ

父母ようち出て見ませむら松の斜めみぎりに不二の秀が見ゆ

母おも父ちちと妻まなごと愛児まなごとうちいでてふりあふぐ空に不二はかかれり

西風吹きて春も浅きか立つ波の潮見清けみ石廊崎見ゆ
にし さや

風速のまこと三保はやまさやかに騒ぎ傍ぎたむ船の多かる
さわ こ

風速の三保の砂やま清しくて遊ぶにはよき玉敷きにけり
すが

おのづから玉敷き明る三保の浦や辺波洗へり清の照る玉
あか さや

朝羽振る沖つしら浪辺に寄ると揺りとよもせり清し浦廻を
すが うらみ

不二ヶ嶺を高みさやけみ三保の崎けふ父母とうち出来にける

世に愛かなし母の御伴みともとさもらひに清すがししら玉え選りてるにけり

しら玉のをさなごころの揺りごころあなたづたづし母に寄りつる

大おほうみ海の晒すしら玉さや清けみと手には揺りつつ遊ぶ子ろはも

遊び足り楽しききはも陽炎の燃えて跡なし浜の長手に

うつつなく笑ふ子ゆゑに砂やまの砂すべりくだるも砂まぶれ我も
砂なだりもとなくづるれ踏み踏みてのぼらむ吾子あこがひた踏みのぼ
る

砂まろび遊びほれつつこれの子や丹塗にぬりの汽車は忘れ来にけり

帰途

砂畑の苺の萎なえ葉もみぢして日のおたる辺を子の手ひきゆく

幼などち何か睦びてしなへ葉の苳のもみぢ踏みて来るかも

竜華寺

三保の松原より清水港へ出で、俣に乗る。短日、風寒し。

冬の田の刈田の眺めわびつつぞ俣つらねぬ風の暁を

冬の日も有縁うえんのひとかまうづらしまれまれながら畦あぜつたふ見ゆ

寒き田をあれや寺かと目にとめて俤急^せかせり薄き日ざしに

竜華寺や彼^{あれ}と俤に揺られ来て行き過ぐる見ればこは鉄舟寺

さむざむと御堂の縁に端居して眼を放つ不二の明る妙はも

見のよろし不二の眺めはこの寺にまさるなしてふ今は眺めぬ

不二見ると君が住みたる有渡^{うど}の山不二の眺めのまことよろしも

日近上人

不二見ると君が臥れる有渡の山げにげに高う不二は冴えたり
 牛 樽

吹きわかれ雲立ちわたる不二の尾の夕影寒うなりにけるかも

一いろに蘇鉄の気のみこもらへば夕さり寒しこれの御庭は

五百重なす蘇鉄の葉叢冷え冷えて日の暮れたらし物の迫るは

日の暮は目見薄らよと宣る父に蘇鉄は寒し層む葉の隈

短か日の御堂の障子かげり来て絵葉書選らむ時過ぎにけり

かの赤きは蘇鉄の実かと竜華寺を出でつつ訊かす父は後見^{あと}て

風速の三保の日和のさだまらでけぎむく不二の尾根も暮れたり

山裾の柿の老木のはかな陽のたのみずくなに冬は宿れり

さむざむと詣でて帰る刈田道かもかく今日も暮れにけるかも

浅宵舟行

清水港より三保へ、竜華寺参詣の帰途なり。 八日

月わかく糠ぬかほし 星満ほしてりかくばかり清すがしき夜空我は見なくに

眉引の童わらべの月のほのあかり見の幼なよと舟は榜こがせつ

月ほそくまだ珍めづらなり有渡山うどやまの山の端あたり黄ばみそめつつ

ほのしろき浅夜あさよふじ不二なれ帆柱の高きは青き燈ひをぞ点つけたる

星あかり凌しぬぎ榜こぐ子か黒船の艦とも出はづれて広うらみき浦廻みを

夜に見れば不二の裾すそみ廻みに曳く雲しらゆふぐもの白木綿しらゆふぐも雲は海に及べり

星宿観望

夜、迎晨台むかしのぼりにのぼる

高き屋たかきやにのぼりて仰うやぐ星の座ざのいや遙とほけくも真まぢか近かなるかも

目にとめて寒き夜空に澄む星の群多からし満ちにけるかも

夜の空に充ち満つ星の少くも目に見えぬ外もまたたきにけり

新月にひづきの早や照りながらみづみづし南天の星の満ちの細かさこま

星の座の連れつつ隣る夜の天は見の親しかも廻りめぐつつあり

ひむがしの夜やてんの星の大きくてひとつは光る不二の尾への上に

まつぶさにしみ繁みに見れば星ほしぐも雲みぢんの微塵の光渦巻きにけり

夜あめの天はあやに清さやけし微塵みぢん数の珍うづの新に星ほししぶき生あれつつ

寂さびしくも永とほ久くに消きゆなと離はなるなと仰あぎ乞こひのむ母おも父ちちの星

我われの星ある或あるは見みゆやと星ほし空そらの五い百ひゃく重じゆうの霞かすみ透とほかしてぞをる

かかの紅あかき妻つまが守もりほしほしし星ほし前まへの世よに薄うす雲くも纏まときぬ今いまもこもれり

幼こな星ほし吾あこ子こが守もり星ほし幸さいかかれと夜や天てんの遥はるに眼まなこを放はなち守もる

空のむた闇はあやなし星の座の今宵こよひの光息づきにけり

去年こぞ今年ことし国の禍まがごと事しきりなり夜天しゆくぬさの宿に幣奉る

おぎろなき夜天の宿は幽けけど人こそ知らね火ほの気け立ち見ゆ

天宮の中なか極はてにして高しらす幽けき星もあれよとぞ思ふ

押し移る夜空の澄みやおのづから星座の極はても傾きにけり

暁雲重畳

天雲の白木綿雲しらゆふぐもの五百重波いほへなみ波だちたぎつ夜は明けむとす

夜の雲の白木綿雲の寄り畳む五百重が奥に不二ふたは隠れこもり

天雲の不二の高嶺の雪雲は五百重も千重も下り畳むらし

望月の月映なして照る雪の不二のいただき暁ならむとす

浅春舟行

大正十二年二月、香取より潮来へ、潮来より鹿島へ、
また舟行して帰る。

深靄

深靄に朝の間あかる日の居処をりどたんぽぽのごと幼なかる見ゆ

黄にまろきをさな童の日の居処靄はふかしと舟ゆあふぎつ

朝花の黄のたんぽぽはいとけなし波揺り来ればざぶり濡れつつ

靄ふかき河心に吼ゆるをさなごゑかな愛し仔牛か舟に母恋ふ

下したん田か早や犁きたらし這ふ靄ぬなみの沼波う撲ち来る土の香高し

傍ぎ着きて火もほのぼのと焚くならし沖田のガスの裾紅み見ゆ

つぶつぶと頭あたまはうかぶ鳩の鳥靄ふかからし鴨のごと見ゆ

舟揺りて子ら取つ組みぬ水ぎはにとてもあざやけき朝花たんぽぽ
牛連れて棹手つぎゆく舟の子ろ繁みおもふや紅の帯まく

ひと萌えの沼ぬべりのなづな露ふかし仔牛食みをりそのあさみどり
香取より鹿島へまゐる舟の路物思はずあらむゆたに傍ぎつつ

靄ゆぎやうごもり鹿島遊ゆぎやう行ぞおもしろき蛙啼かへるく田の間あひを傍ぎつつ

露くさの花いろふかき沼波は榜ぎつつ繁し靄に見え来て

返照

赤の牛乗せ来る舟のひとうから夕風沼の広みにとあり

家の牛かい乗せもどる作舟さくぶねは夕安からしとろき櫓の音

櫓の音とよき耕作舟や日を犁きて雌牛揺り乗せ今戻るらし

夕光ゆうかげの水門出づる舟ひとつ牛正面まともなり朱あけに燃えつつ

夕風の遍照光となりにける沼尻ぬじりの紅き太陽とポプラ

舟遣やらふ子らが棹手のたぶつくは夕照り淀か揺りこたふらし

遠明り夕沼ゆうぬとわたる舟の上に静立しづたつ牛の大きくは見ゆ

おほかたに真菰は焼きぬ沼の辺の芽の青しもよ母と子と居る

沼のべに黄のたんぽぽを摘む童わらべふかく嗅ぎて棄てぬ次の花をまた

牛の吼ほえおほらにとよみゆふべなり沼ぬまいつぱいの金こん色の空しき気

夕光ゆうかげのかがよふ舟ふねに頸うなかぶし目見まみおとなしき黄あめの牛はも

この眺めゆたかに寂さみし黄あめ牛うしも家路いへぢの舟に日を見かへりぬ

櫓をあげて棹さしつぐと夕沼や細長堀へ舟はひりつつ

潮来舟いたこぶね夕づく水照みでりゆきつめて寒き葦間に入るがさびしさ

夕沼は遍照ひろしまれに来てかかる安らに会ひにけるかも

この安ら暮れであらめやよくぞ来て夕沼ゆうぬの水照りうち眺めたる

櫓の音

櫓を榜ぐと帆は巻き入れて春はるあま雨間香取の浦をうちも出でたる

舟びとや押手おしでひきで引手のゆりゆりに足踏み換ふるうつら櫓の取り

舟びとは榜ぎぞ足らへれ少くも櫓をし愛をしみぬ揺り遊びつつ

たぶたぶとあたる水の音や櫓の取りのか揺りかく揺りその緒張り
 つつ

日の暮の水照みでりまぢかきひとたひらつぶりつぶりと鳩は出てゐつ

けける鳴く声は放てど夕照の日の方附くか眩まぶし鳩見え

舟にゐて春は炬燵のうづみ火のはつかに赤し湿しめらひにけり

微塵光

宵空の微塵みぢんの光おぎろなし人は牛曳き家路をたどる

微塵光夕さり永し芽やなぎに燕のむれは頬をそろへつつ

おもて
表より背戸の夜空ぞにほはしき柳しだるる川づら榜こげば

色の隈くま揺り揺りひかる接つぎ襜どてら袍夜釣すらしか榜こぎのけぶかさ

たぶんたぶんとぎんざら真菰揺る水のながれは絶えず榜がで流さ
む

十二橋三つはくぐりぬ糠星にせんだんの実の明あかる空見て

夜の靄に焚火する子の面あかりちかぢかと見つ潮来には来し

十二橋

落椿多し

落ちつばきそつぽ外方向きつつしべ蒔わかし落つるただちを坐りたらしも

春雨の地面ぢべたのつばきひたあか紅しいくらかは濡れて動きたるらし

しつとりと雨がなじんだ
 粃がらに明りさしてる
 紅落椿べに

粃がらも紅い椿も暮れかけて
 むる暮れて動いてる
 雨がふつかけ
 るのだ

花だまり椿のあかき背戸道は
 ふる春雨の日暮らしどころ

空堀からほりはつばき層かさめりゆきつめて
 後戻りするその里道を

春雨繁し

板わたす用水堀のこぬか雨遠田をち近田こちもとみに萌えつつ

魚すくふ童が叉手さでの水あかりほの温ぬるむらし尻はからげつ

背戸堀はふる雨繁し飼ひ鳩のつけ糸曳きて泳ぎつめつつ

雨はまだ粒つぶだつ橋の片てすりつかまりてのぞく子の面かほふたつ

雨空にせんだんの実は明るけど簑笠つけてとほる人あり

この里の春やさみしきおとなびて莚織る子が梭手をさで尽きなく

春雨に藁すぐる子らひめもすや顔はあげずて暮れてしまふらむ

つらつらに遊ぶかけろ鶏のをる庭はふる春雨にぬれて来にける

この雨や春雨ならし芽やなぎに帆檣ぬれて船ももやひぬ

碓氷の春

碓氷嶺うすひねの南おもてとなりにけりくだりつつ思ふ春のふかきを

裏妙義つつじにほへり日の道やいただき近う寄り明るらし

熊蜂の翅音かがやきおびただし春山ふかく営みにける

黄金虫こがねむし飛ぶ音きけば深山木みやまぎの若葉の真洞春ふかむらし

こちごちに若葉かがやく日のさかり四十雀飛ぶ山片附けば

靄もやごめにもえてかがやく朱しゆの若葉碓氷峠の旧道ゆけば

深山路はおどろきやすし家鳥の白きかけろ鶏に我あ遇ひにけり

山吹の一重の花の咲きしだる春山岸はるやまぎしのにはとりのこゑ

上つ毛へ碓氷をくだる春のくれ岨うづみ咲く山吹のはな

こなたさす使ひ童か見えつつも躑躅あかりをなかなか来ぬかも

前山さぎやまに紅あかきつつじか日の照りて霞こめたり見さだむらくは

山路来てひたすらひもじ露の葉に満ちあふれゐる光を見れば

谿高くガアドそぎたち夏ちかし 木もくき 橋やう ゆ仰ぐ若葉の光

物のこゑひびかふきけばおほかたの若葉は和なぎてほど経ちにけり

谿ふかくたぎつ瀬の音ともまじるらし嵐あかは明し一山若葉

春山の道のたをりにちりそめて板屋かへでは翼は紅あかき莢

蓬か伸びけろ鶏群とんねるれたり 隧道とんねるの断れ目の岨の光の崩れ 以下二首坂本

の宿

日はかすめ清さやにこごしき妙義嶺の檜山のなだり夏立ちにけり
山すそは夏の日ざしのいちじるし楓の花もちらひそめたる

星野温泉

ほうほうと落葉松からまつ寒し夕あかき鉱泉道のうねりをのぼる

製材の響けざむきたにぞひ谿沿は夕附ゆうづき早し材小屋きごやが二つ

幅広き谿岨寒し牛乳^{ちち}買ひてつらつら戻る夕日の光

前山^{さきやま}の夕光^{ゆうかげ}寒きから松は材小屋の前を行きつつし見ゆ

早春

採水池青みそめたりかへる子や頭重くも揺りをどりつつ

鷹来りおたまじやくしは食^はまれけり沢べの芹もしじに青むを

塩沢村

上の田かみゆ下田しもだへ落つる水の音のおのおのよろしぬるみたらしも
明るけど洩れ陽はさびし久しくも村にはこもる風かとおもひぬ

胡桃わりつつ

枯れはてて見のなごやかににける谿の河原の穂すすきの群
日向べにほのあたたまるわびごころ胡桃くるみわりつつ飽きもせなくに

押しあててかたき胡桃は手たちから力こめ掌にぞひしりとつぶしつるか
も

ほろぬくき今日にもあるかしばしばも胡桃の殻を膝にはたきつ

§

夕雨に踏みやはらかき落葉松の落葉は紅あかし沁みにけるかも

乳牛

朝あさ光かげに牝牛曳き出だししほる乳の雑あらく草きをうつ新にひほとぼしり

ゆたに立ちて乳をしぼらせてゐたりけり母おやうし牛はよしこの朝あさ光かげ
を

おもおもと桶にたぶつく生なまの乳の青葉くさくてまこと牛の乳

翁ぐさ

子の眠れるまを妻と出て

熔岩谷ラヴァだにはよく霧きらふらし日が射してしばしば寒し妻とかがむに

天つ日の光はわかし翁おきなぐさ地つちにぞあかく笑あはまひ初そめたれ

山原やまはらの轍わだちにあかき翁おきなぐさ愛あいしきものを我が見つるかも

をさなごやまだ覚めざらむ妻と出て翁おきなぐさ踏むこのしめらひを

林道を車きしませ来し鹿毛の眼が光りたり翁おきなぐさの花

浅間山麓にて

黄の蝶の林に住むは幽けかり落葉松も芽ぶきそめにし
らくえふしよう

うち響き山のこだまのけ寒きは唐松の枝扱こき放つなり

早春

翁ぐさ

山原は轍とも思ふ道の窪に光り出て紅し花翁ぐさ

翁ぐさあかき手にとり土つきて冷ひやき和毛にこげは弾はじきつつ歩む

から松

落葉松のす黒き林露はなりまだ照り寒き光線ひすぢそそげり

から松にから松の影うつりをり月の山路にながめて来れば

芽に匂ふ落葉松原の夕月夜かすかにひびく田蛙のこゑ

月の夜の自動車道のか広さよ山蔭遠く蛙の鳴きゐる

小山田は早や水張れりいまだしも落葉松らくえふしよの梢は芽ぶかず

朱と紫

七面鳥

山茶花に雪ふりつもり閑しづかなり七面鳥のくぐもりのこゑ

雪早ししきり膨るる勢きはひ鳥七面鳥の尾羽響き鳴る

団扇羽うちはばの佝僂くぐせの碧すき素すのあたま七面鳥に雪はふりつつ

七面鳥けける歎けば斑むらあを碧むらあをの朱肉揺れ伸ぶくちばしのうへ

真青まさをにかうべすくめて張り来る七面鳥の強こはもて面の歩み

両つばさ地に張り歩む傲り鳥七面鳥は見らくしよしも

雄に添ひてかがよふ青き頸のへり七面鳥の雌の細みかも

世に愛し雌にし矜ると張る尾羽の七面鳥は燦きらきら々きらしかも

七面鳥おほらかなるかな雌を追ふと広庭をまろく大きくまはる

真まつこう向におごり息づむ張胸の七面鳥の脚の短かさ

印旛沼の紫くろ黝き雪ぐもり七面鳥は膨れ真向ふ

膨れ来てたまゆら停る七面鳥乳ニツプル頭の垂り紅く今燃ゆ

七面鳥翼ひびかし歩をやめず白き蛾のごと雪乱り来ぬ

七面鳥車輪のごとく張る尾羽のゐさらひ紅し雪吹きつけぬ

紫の生あれ来る雪のとどまらず七面鳥は啼きにけるかも

雪の間を硝子障子に來寄り澄む七面鳥の乳ニップル頭の光

泡雪の斑ふの紫の車尾羽七面鳥も春を待ちつつ

雪景

刈跡はつむ雪早しこちごちを葦づか白う見えまさりつつ

印旛沼の狭き細江の向ひ丘早や目にしろし雪つもりつつ

夕照

刈り継ぎて夕照寒き出津の野や葦づかおほく見はるかしつつ

西寒し萱野の遥に落つる日のこよなく赤く一つころげぬ

土間の鳥屋

夕土間の鳥屋とやのはしごにい寝ぬる鳥七面鳥は肩高く見ゆ

鶏とりの栖すのくらしき梯子にのぼりて寝て七面鳥は下寒むからむ

土間の栖すも夕寒むからしまだいねで層かさみおぼめくうつつ家いへ禽とり

吊棚にい寄りくぐもる数の鶏とり夜寒よさむは見居りかまど竈ど火の揺れ

おのがじし頸根うなねかい曲げ寝る鳥の今宵のねむりあたたかくこそ

吊りとぼす提灯の紋の抱茗荷湯にぬくみつつ見てをり吾れは

夜は寒しひとさしくべし風呂の火に驚は啼きぬ炭櫃のまへ

夜はふけぬねむりまどけき土間の栖すに何鶏かほの面かほか白う浮き居る

霜の朝

霜の置閑しづけくしよし朝まだき近き野にゐる家禽いへどりのこゑ

霜の野に朝日さし照りあはれなり鶏と鶩と七面鳥のこゑ

七面鳥朝明あさけの霜に居竦むは目のふち碧し葦づかのまへ

霜ふかし霜ふかしとて出でて見て一面の冬の朝日の光

朝を出て襜袍かかぶり聴きゐたり萱の濃霜のとけてひびくを

張る尾羽の白孔雀な如し円かなりひとむらの萱に霜ぞ満ちたる

いつの日か馬に食まれて葦莖の伸びはそろはで霜に枯れにけり

火をつけて萱の刈穂の束なりに燃えさかり来る音のよろしさ

野の土手を蜷触れ来る声はして閑しづかなる霜の朝やこの朝

霜の煙けのいまだ流らふ萱の屋に山茶花は紅しよくうつりつつ

水禽

水禽の驚水かく屋敷堀楊は寒しいまだ芽ぶかず

印旛沼しろき明りのとほどほに葦鴨啼けり月の夜寒よさむに

印旛沼いり水口りの細江に寝ぬる鳥の青頸鴨のこゑはひびけり

余寒

印旛沼の出津の萱原萌えそめぬ夜頃は月の冴え返りつつ

浅春

暇路の芽張柳のあさみどり何かになへる人揺りて来る

初夏の光線

七面鳥

春過ぎて夏は日射の明らけし七面鳥のかがよふ見れば

朝あさ光かげに一羽出てる真向き鳥七面鳥はまだ啼かずけり

莎草くぐの紅べにいまだするどし七面鳥もそろあゆみぬ蹴けづ爪めをちぢめて

夏もやや鳥屋とやの外面とのもの照りつよし雛鶏ひながかける突きころぶかに

真ま白羽しろはの七面鳥の夏すがたかがやかに小さし野やを隔て見ゆ

張り来りたたら足踏む七面鳥いや照りしらむ陽の直たゞ射さを

真昼日のかぎろひ白き庭のうち七面鳥の足踏深し

落ちたまり黄なるつばきの腐れ花七面鳥はよそよそしかも

七面鳥なにかいらだつ日のさかりむら碧の朱にくの肉嘴しひびかふ

七面鳥ひた迫りつつまじろがず肉嘴燃え伸まっぶ真向かうの垂り

一いつ氣きに押しゆるぎ来て大きなる七面鳥のひたぶるの振り

かぎりなき陽の照り白し留り立つ七面鳥の影の大きさ

産屋うぶやど戸どに堪へてこもらふ雌の細み春は日射も外とに白らみつつ

七面鳥照りゆるぎつつ歩ほは遅し尾羽響き鳴るひと足ごとに

七面鳥尾羽鳴らしつつ廻り居り春埃立つ明るき庭を

春まひる七面鳥の尾の張りの照り円うしてそよぎやまなくに

張る尾羽の真横見せゆく揺り歩み七面鳥は音深めつつ

鳴り深む七面鳥のしづけさよ蛙啼かはづく田の遠く照りつつ

ほのぼのとまなぶた紅き巢守り鳥七面鳥は卵いだきぬ

栖すにこもる七面鳥のひたごころ俵にのぼる陽の目よみつつ

栖に向ふ雄の七面鳥真昼なり張りふくれつつおもむろにはひる

夕遅き厩のまへの日の光七面鳥は行きとどまらず

さうさうとい行きめぐらへ安やすからず皺しわばみ碧き七面鳥の面つら

立尾羽たてをばのしみらに光る日のをはり七面鳥も遠く見て居り

夕光ゆうかげのさわさわと揺る尾羽の張り七面鳥がうしろ見せつも

野へ出て

出津の野は莎草くぐの芽紅あかし芹摘むとそこらこころを吾がかがみつ

一二方ふたかたを雲雀ひばり囀れりうち羽振り大きな円に小さな円に

二つゐる雲雀とし聴きうら安し吾がつむ芹は籠にふえつつ

二つあがる囀りはあれうらがなし雲雀啼くとしただに聴きつつ

鯉

右ひだり生きの真鯉をひとつづつ手づかみて来る印旛びとなれ

両もろの手にひたぶる抱く鯉ひとつこの童は泣かむばかりなり

菜菔

朝あさ光かげのほのくれなるの菜菔くみのはな目にあきらけき雨を保てり

海
阪

トラピスト修道院の夏

正面

烏賊乾してただ日ひなくさき当たうべつ別の荒磯ありその照りよ今は急がむ

修道院へ行く道暑し絮しろき河原ははこも目につきにけり

山独活の花明らけしおのづから洩れづる息をうれしみ休む

空のもとトラピスト修道院建てりけりこの正面の昼のしづかさ

燕麦えんばくは今刈り了をへて真夏なり修道院にいたるいつぽんの道

裏山の青さをの円山のぼりをりよく群れしかも人と牛と羊と

女人禁制の札あり

影面かげともは朝から暑し来て通る修道院正門のみそ萩の花

修道院の玄関の前に立ちにけり麦稈帽をとりつつ我は

修道院朝風暑し小手鞠や花あぢさゐの藍も褪せつつ

白薔薇しろさきうびふふむは紅あかし修道士のひとりは前を歩みるにけり

礼拝堂

聖堂のステンドグラス午ちかしをさなかるかもこの基督は

玄関の内部

乳をふふみ幼きいえすいますなり時計の針もめぐりつぎつつ

行列廊下

基督の受難の額の裏のかけ廊下の青きこの光線を

行^{ぎやう}道^{だう}の波型寄木踏むべくはこよなき光流らひにけり

階上の寢室

一一^{ふたがは}側に寢室^{とぼり}の帷垂り白し真昼は空しそよりとせせず

照りつづき白き帷の真昼なりひたけうとしもトラピストの寢間
とことはにまかずめとらぬ修道士のむなし寢部屋よ日のほてりつ
つ

ORA ET LABORA.

祈り且つ働けと云ふすなはちよしかの修道士は丘に群れたり

日とともに出でてちらばりうやうやし彼等は空をいただきにけり

牧ぐさのくれなる柔やはきうまごやしかな愛し麻利耶よ彼ら夢みぬ

木工場の内と外

言ものいはず群れる木を挽く毛ごろもの褐くりの頭巾の日の光はや

木履サボウをこつこつと割り暑からし息づきあます深きしづまり

修道院の昼はてしなしほこぼこと人歩むらしき木履サボウの音あり

後園

よく掃きて日のさしあかる道ほそし林檎のもみぢちりそめにけり

木履^{サボウ}はきてさびしがり行く日のさかり木槿の花が白う見えつつ

更にうしろは畑である

弥撒^{ミサ}過ぎぬ修道院裏は毛の紅きたうもろこしの一面の風

墓地があつた。外国人の神父たちも埋められてゐる。

から松の木洩る光線ひすぢや目にとめて地に幽けきは奉教人の墓

トラピストの墓原の外とよ南風みなみ吹き唐黍の紅き毛のそよぐなり

真夏日の光に聴けば遠どほし緬羊の声は人に似るなり

ルルドの洞窟にて

美くはしみと外とに出て見ればこの空や七つの岬海に向ふ

牛舎近くに出て見る

夏だ夏だトランプスト修道院の柵の外に遊ぶ子供がまだはしやいで
る

照り強いゆきかへらひ憤るここの七面鳥は胸羽根真青
むなばねまさを

青刈の花ひまはりを食む牛のはてなき暑熱しよねつ我は見にけり

草積みにほひて香まさにほひさをき馬ぐるま牛舎近くを駈け込み来今は

赤松林を通ると蘿風君の旧居があつた。

岩清水しんしんとして夕近し赤松の幹の映れる見れば

谷隈の小さき泉の夕ひかりわれはひたにし口をつけつも

赤松の林を過ぎて夕づきし広原は見つ馬車の駈くるを

夕づきて何かひもじきひたごころ赤松の原をくだりつつ来し

つつましく君が住みけむ跡どころ谷沢越えて我は見に來し 消息

フオクとは木製の一間ばかりある草掻きのことである。

フオク持つ人もくもくと掻き掻けり燕えんばく麦ばくならし黄の穂かがやく

頸根うなねつきかさりかさりと夕さむし草ほこり掻く修道士ふたり

晩鐘が鳴つた

修道院鐘を鳴らしぬ安らけくけふのひと日も晴れて暮れたる

修道院夕さり安し栗いろの群の毛ごろも竝み帰りつつ

月夜

月出でて明るき宵や修道士たち今は帰り来^く木のフオクもちて

丘の上^へに大きくうごくフオクのかげ月の光にまだ一人ゐる

晩禱

夕闇の御堂のいのり声もなしあかき燈^ひひとつまたたきにけり

こよなくも聖せいたいごう体盒たいごうのほふなり何か美めづしくわれが泣かゆも

客館で私たちは晚餐にあづかつた。赤いボルドオはほんぽん抜かれるし、アルコールぬきの麦酒も出た。

修道院の窓あけはなち晚餐なり甜瓜メロンがまろし月の光に

修道院こよなく明し燈ひのつきてこの焼豚くの塊れの美めしき

われ立ちて今は踊らむ月あかり深めば鐘もゆり傾かしぐなり

月がいい。前庭に私たちも出た。「おんこ」とは「いちる」のことである。

円刈のおんこに光る月のかげまさしくここは修道院の庭

聖堂の夜の連禱もはてぬらし月に出でてをりふたりみたりのかげ

修道院の玄関の前の月夜なり神父アツパ歩めり話をしながら

天の露いよよ繁みか後の野に馬放たれて涼しこの夜良よら

丘の上へに大きちひさき馬のかげ月夜すがらに見えてゐしかも

月の夜をしきり傾く鐸すずのかげ友は見しちふ我は聴きつも

客館の横にポプラ並木がある。

ポプラ葉のかがやく見れば常ながら空のあなたよ見の美くはしかも

梢うれつづきかがやき久し日のさかりポプラ嵐に雀流らふ

今日もいい晴である。

修道院鐘の音美くはしまさしくもこのみ空は蒼うかかれり

空晴れて鐘の音美しくは 苜蓿つめぐさの受胎くはの真昼近づきにけり

空晴れてまた事もなし山なだり茶の毛ごろもの群れのぼりつつ

乳酪工場の附近を逍遙した。

山鳩の居りて閑けき葡萄畑青うこぼるる日ざしなるかも

さみどりのキヤベツの地より湧くところ人つくりをり新しき乳酪バタ

帰途

わが歩みひたすらさびし昨日見し木槿の花は白かりしかも

アイヌ村風景

師団道夜の明けて広しさるさると唐黍売もふれて来にけり

この朝かげすばらしくよし毛のあかき唐黍を呼べば馬車にはふり
こむ

ひた駈けに馬車を駛^{はし}らしすがすがし唐黍の穂の朝日なるかも

朝の日を馬車はかへしてあゆむなる大豆畑の露くさのはな

畑つもの豆の葉よりも露くさの瑠璃いろ深しすぐアイヌ村

朝の気の流らふ広き大豆畠旭川郊外に来てをりわれは

耳とめてこの野は広しこちごちにひびかふものの音のかそけさ

水の音今は聴きあつこのあたり隠元豆の花がしろしも

あるアイヌの家にはいつて、お婆さんに唐黍を焼いて
もらつた。 二首

たうもろこし焦げてにほへりはるばると遠来し旅を堪へてゐるか
も

唐黍の焦ぐる待つ間よつくづくと摂政の宮の尊影みかげを我は

おんこ彫る爺おぢのアイヌがあぐらゐをい寄り見て立つさぶししやも和人我

日の澄みを毛深きアイヌ立てりけりほろびつつあるその厚あつしぎ志着を

家屋ちせの外との熊ベウレツプチス檻このあした愛かなし仔熊も起きてゐるかも

往還に眼めのくぼ窩ふかき子は立てりほろほろと乾かはく直ひたつち土の照り

除虫菊

鴨

韃鞬の海、波のうねりに揺られるて遊べる鴨か大きうねりを
平らにぞ凧ぎ青みたれ泛く鴨のかくろふ見れば大きうねり波

うねりの深き凹みへ迂る見し盛りあがる波を鴨の乗り来る

揺れあがる波の平になりにけりしばしとどまり鴨の確たしかさ

海上

韃靼の海うなぎか 阪黒しはろばろと越えゆく汽船ふねの笛ひびかせぬ

かき坐り仰げば巨き帆ばしらなり我この汽船ふねをひたに頼まむ

耳あけて深くしづもる四五本の通風筒の前の照なり

波の上にはぽつかりとありはてしなし走れる黒き煙突のかけ

音江村

日ざかりの道のべゆけば株だちてまだ柔かき箒草のいろ

除虫菊白きを見れば新みどり唐黍の毛もかき垂りにけりにひ

歩み来て林檎畑にはひりたり日の明りつつ広く閑けさ

夏山の林檎畠の日のくもり白きかけろ鶏の閑けかりけり

一 いっちゃん 巳の屯田兵の村ならしややに夕づくこのみおろし瞰望を

日は近しつくばふ牛の鼻づらを見つつ過ぎたりかむぼちやの花

牛小屋のおもての紅き巴旦杏手のとどくところはみなもぎりたり
蓮のはなほのけく赤しはひり来てここの牝牛の乳をもらひをる

澱粉靴といふものを子らははいたりける林檎畠を出て来る見れば

常掃きて日射透ひざしつほせばうやうやしこの牛小屋の青牛のかげ

家の戸に去勢無料としるしたり夕ゆふかげ光あつきこの往還を

青き林檎

北海道深川町の郊外、音江村にさる林檎園あり。たま
たま町のK氏を訪るるに、今は人妻ながらそのKのそ
のかみの恋人なりと云ふ女性ありて茶を供し、まだ小
さき林檎などむく。我もただ庭を見、池をながめて、
言葉なくみぬ。

寂しくてなにかまぶしき日のくもり青き林檎をながめるにけり

うすうすと林檎の梢葉染うれはみにけり百舌の翔かけりはいまだ暑きに

つぎほなく閑けき夏や時あかる蜜蜂の翅音そこら響かふ

風たちて涼しく皺む池の面に百日草の影もうつれり

役場の前のさる歌人の牛飼の家にて

音江村一覽表をもらひたり役場のまへの鶉豆の花

直^{ひたつち}土に子らかき坐り夏おそし種人蔘の立枯れの花

傾斜地の虫除け菊のしろき花いまはつぶさに見て下るなり

深川郊外

遠山に白虹降^ふりる閑^{しづ}かなりこの石狩の国の大きさ

白壁の反^{かへ}し陽^び見ればやちだもの木立の木膚^{こはだ}かがやきにけり

オホツク海にて

一等船室

のうのうと謡うたひのこゑはそろひけり陸ひとつ見ぬ海に來にける

海に來てはたやあはれか老らくの連つれ多くして謡ひほれたる

豊けてかへてあはれぞまさりける謡のこゑの風にそろへる

能のワキの囃の笛を吹く人あり

能の笛ひやうへうふれうと起りけりオホツク海の真夏日の風

空のむた陰りて円かげきわたの原笛のひとつの音いろ響かふ

薄ら陽

いつしかと日光ひかげかへ反さずなりにけりオホツク海の波の穂のいろ

オホツクの波は光らずたどきなし甲板にひとつ我の足音

オホツクの風はてしなし日の洩れて未あかりしが照らず止みたり
雲の上を日の行きながれさむざむしオホツクの海いまは観にけり

国境安別

安別沖まで

巻きなだりいやつぎつぎに重き層む波の穂冥し海豹の顔
し
かさ
くら
あざらし

日の遠き北に來にけりこの海やたえて光らぬかぐるき荒波

名も知らぬ黄なる花むらなだり咲き目もあはれなり時化波の隙間しけなみ ひま
 凄まじく海ぞ荒れたれ目じろがず人は乗り來る舟の舳への反りそ

砂浜

昆布こぶ食みて慧さとき鼠か長き尾の乱り走りぬ波裂くるとき

ぺんぺんとなづな実りて群れにけりとどろきくらき波なだり來ぬ

海豹^{あざらし}は頬の髭黄なり孔まろき白き頭骨^{づこつ}となりはてにけり

鯧乾場

日の光薄き浜びの板びさし春の鯧は燻し了へにし

マントの黒き頭巾のふっかけ雨巡查は佇てり露の葉のかげ

浜びさし雨あぢきなし紙旗の日の丸の紅も垂りにじみつつ

ふたつ眼の毛皮^{ひぐま}の鬣つるされて吹っかけ過ぎぬ網小舎の雨

この雨の樺太車前草踏み柔み村かたつくと親し車前草

夏、夏、夏、露西亜ざかひの黄の葎の花じやがいもの大ぶりの雨

夏もなか黄なる鈴菜が明るなり北の日本のいやはての村

日のひかりいとど薄きを菜のはなのうつしく咲きて黄なりこの浜

菜の花に藻くづ昆布こんぶの塩じめば北の日本の春もいぬめり

鯨粕脂あぶらのり来る溜ための面雨おもは沁まずてはねてちりつつ

ななかまど

あかき実のななかまどといふ藪の崖子供飛びをり鳥のまねして

ぎやをと啼きました声継つがずどしやぶりの実のあかき木に海猫はる

天測点へのぼる道

玉ぼこの道つくりびとすがすがし露と萱とを諸もろに刈りそぐ

ぬかるみの新墾道にひはりみちの吹きあげ雨そ反り立つ露の裏しごきうつ

吹きつけて息づき過すがふ霧くれの塊くれ樺太露の葉をひるがへす

茎高の葉広露うつ雨の音今はたしかに国境に來し

国境標附近

驚ひとつ石のうらべに彫りにけりそなたにあらき虎いたどり杖の花

雨、雨、雨、虫くらひ葉の音繁きこの虎杖は露西亜領の花

椴とどまつ松の霧たちかくす日の在ありど処気流の冷えがとみにししる著し

ここの空きびしく寒し椴松のうれを久しく霧はながれぬ

巖いっかしき国の境や椴松に雲白うゐて凝こごりたりけり

北樺太ピレオの村も寒むからし蝦夷松疎く雲こごり見ゆ

獵^{かりうど}人のピレオ出て来る寒き影はたや向ひの尾に立つらむか

国思ふ心はもとなどまらず雨はさ青の芒^{のぎ}を流らふ

雨は小^を止^やみ草山なだりさみどりなり日本の村へ一氣にすべる

韃^に鞞^し海西風吹きあげて立つ雨の色まつしろし潮さみのうへ

時化後

小学校にて番茶を饗せらる

黄の花の鈴菜畑のざんざ雨鷗あがりまろき眼をして

日本のいやはての北の小学校水い蟬ぼた樹た蕾みて夏休みらし

隆盛の大き目の額見つつ出てすずろにあか紅しいたどり虎杖の花

電信局にて

ワレライマヤコクキヤウニアリ、むらさきの花じやがいつもの盛りに打電す

じやがいもの花の香しるき頼信紙このふきぶりに濡らしけるかな

缶詰工場は休みて商品陳列所となれり

雨しげき鯁にしんかんば乾場の実のなづな国の境も見つくしにけり

樺太犬のそりとを居れ雨しとど吸ひふくれたる葱の玉鉾

われさぶし噴出ふきでの清水大木桶の溜ためあふれあるそればかり見る

こんこんとしみみゆり湧く旅ごころ水は噴井ふきゐに盛りあがりつつ
 うらさぶしうらさぶしとを選びゐたり 燻いぶし 鰯にしんの黄の腹の焦げ

端舟に乗る頃

タづきて遊ぶ童わらべの寄りどころ蟹の甲羅の朱も古りにけり

時化しけあと後の海ひたくらし向ひ立つ女の子がふふむほほづきの音

幌馬車

音江村

山方はけはひ幽けくなり
にけり馬車ひとつ行けり
虎杖いたどりの原を

幌の馬車とめつつさびし
虎杖の虫くらひ葉の日ざかりの照り

オホツク海拾遺

波のみね千重しくしくにかが
やかかず海豹島も目路にかくりぬ

松島

みちのくの千賀の塩釜雨ながら網かけ並めぬほばしらのとも

みちのくの千賀の塩釜雨に来て木の橋わたる大き木の橋

千賀の浦夕立つ雨に船立てて雄島のはなに着けば暮れたり

松が根にきちかうの花開きけりこの松島に今朝は思はむ

松島の海岸どほりまれまれに人あそびみて日射秋なり

瑞巖寺に泊る

大寺の厨のそとの水ために清水あふれて朝焼けにけり

瑞巖寺の朝餐あさげの魚板響くなり顔洗ひつつよしと思ひぬ

僧たちと朝餐の席にならびたりつつましくしてほがらかにあり

飯櫃にたきたての飯の湯気たてり大寺はよしこのあかときを

瑞巖寺をまかりいでつつ朝早く松島が見ゆ雨後の松島

松島瑞巖寺前のさざら波施餓鬼すみたるあとのすずしさ

金華山沖

潮のいろ深むを見ればみちのくの金華山沖に今かかるらし

海に見て地球のかたちまろ円しとわらべふ童は小さしよろこびにけり

帆綱張りゆゆし安けし太敷ふとしきて巖いっのほばしら根生ひ据れり

真上まうへぞら空飛ぶ雲はや迅しまさしくは巨おほきマストの揺れかしぎつつ

かたむくと見つつ待つまをとどろかず巨おほき濤なみ凄あがし騰りきりたる

まなかひに落ち来る濤あとの後なみ 濤の立ちきほひたる峯のゆゆしさ

躍り立ち羽搏うち巻き立つ波の穂のあひだに徹り青空のいろ

勢きはひ立ちただち砕くる波の穂のしぶきが飛ばす潮の珍うづ珠だま

巻きかへ翻る波のなだりに飛ぶ珠のとどろきの泡ぞ白く競へる

渦うづ潮しほのたぎつ潮しほ漚なはしづまらず浅みどり透くその白き泡を

潮漚の消ゆと浮ぶとおもしろと見つつ見あかず騒さわぐ潮漚

海わだなかに夕餐の銅鑼どらのひびくとき火星は赤くあらはれにけり

青海原あをうなばら夕さり来れば壮麗なり夜の高麗丸こままるは灯ひを列つらねたり

海わだなかに音耀かがやけり夜はふけてしんしんと進む生いきもの物高麗丸こままる

津軽海峡

まさしく津軽海峡に入りにはけり早や見る青き草崖あをくさがけのいろ

とどろと雲噴き騰りあがあざやかなり汐首岬あをあらぐさの青の雑草

岬せつさうの雑草と雲のあざやかさ汽笛ふえ太く吼えて挨拶ふねす汽船は

津軽の海南風みなみ吹き晴れ午前なり汽船ゆきすすむその中道を

煙曳く煙筒並び爽かなり高麗丸はよしこの海峡を

この汽船ふねの巨き煙筒おほけぶりなびき渡島をしまの子らは此方こなた見てあらむ

津軽の海雲はろばろしいにしへや大群たいぐんのアイヌここ渡りけむ

津軽海峡はや秋ちかし雲の秀ほを耿こうとして渡る小禽の群あり

仮装行列あり

この汽船や笑らぎ照り恍けはてはなし海峡の午後をゆきすすむな

り

大船に日は照り満ちぬ紅つけてをどる一人が影の短かさ

ひと船の愛し戯けもはてにけり津軽のかたに日は隠りつつ

津軽の海風に群れ寄る味鼻の命なりけり粒黒くゐる

つらつらに鴨の泛き来る蒼の波うねり大きく見えにけるかも

渡島の縦の赤雲竝び立ち見のはろばろし星の透き見ゆ

天に三層あり、中なる天を「星のゐる空」或は「騰れる空」と呼ぶ（アイヌ昔噺）

ぬか星の騰れる空にさ霧立ち今宵は清しすが蒼海さかの境

月のもといとど巻き立つ赤雲のかがやき近し崩れずあらなむ

鴨

沖つ鳥鴨のかしらのま青さをくてつらつらかなし泛をきにけるかも

もこもことまだ盛りあがるたづきなき波の胴腹をに鴨は居るなり

まなかひにおほにそびやぐ蒼あをの波かなたなぞへに鴨は居らしも

つれづれと鴨のすべるぞおもしろきこなたなぞへになり来る波を

夕風の海、波のあひさにゐる鴨のかなしき声は空にとほれり

ここ過ぎて草は空より新なり 汐しほくびざき首岬といふがかなしき

正眼にも夏は光りてとどろきぬ汐首岬の雑草のいろ

青空文庫情報

底本：「白秋全集 9」岩波書店

1986（昭和61）年2月5日発行

底本の親本：「海阪」アルス

1949（昭和24）年6月15日

※「夕光」に対するルビの「ゆうかげ」と「ゆふかげ」の混在は、底本通りです。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※小見出しよりもさらに下位の見出しには、注記しませんでした。

入力：岡村和彦

校正：フクポー

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海阪

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>